贖罪の魔術師

暇人A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
贖罪の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ００４９Ｙ

【作者名】
暇人Ａ

【あらすじ】
一生に満足して死んでいった１５歳の少年。彼は気が付いたら６歳児として異世界に転生していた。その世界はもうすぐ破滅が迫っているような世界、少年は気にせず家族や友人と平凡ながらも楽しい生活を送っていた。ところが……
※処女作です。変なところとかがあったら感想欄で優しく教えてくれるとうれしいです。
※タイトルが関係してくるのは二章からです。一章はほとんどほのぼのしてます。

プロローグ（前書き）

作者は初心者なので誤字脱字や矛盾があるかもしれませんので優しく教えてくださると助かります。
未熟な作品ですが楽しんでいただけると幸いです

プロローグ

「なかなかいい人生だったかな。」
僕は病院のベッドの上で呟いた。

もうすぐ死んでしまうのだし僕の短い生涯を振り返ろうと思う。
と言っても別に特筆するようなことはないありふれたものだけど……
僕の家庭はどこにでもあるようなありふれた家庭だった。両親は共に働いていて幼いころはいつも近所の大地や優花の家に預けられていた。
大地と優花は僕の幼馴染だ。二人とも僕には過ぎたやつらだったと思う。
大地はスポーツ万能でワイルドな好青年で、いつもみんなの中心にいるようなやつで僕の親友と言っても過言ではない。
優花は才色兼備で、告白された回数は学校でもダントツだ。なにしろ学校の二人に一人は優花に告白したことがあったからだ。それを全部断っていたのは多分大地が好きだったからだろう。一度そのことを優花に聞いてみると腹をえぐるようなボディーブローを食らった。照れ隠しだろう。そう言ったら今度は左フックを食らった。泣きそうだった。
そんな二人との小学校、中学校生活はそう悪いものではなかった。
一か月に一回はある恒例ともいえる優花への告白騒動や泣きついてくる大地との試験勉強……なかなか面白いことばかりだった。もっとも一学期に一回は大地が何かやらかして僕まで怒られていたが……理由はたいてい大地だけじゃあんな周到な作戦は練れないとか大地にしては準備がいいとかで僕が手伝ってると勝手に決めつけられていたからだ。全く、理科室潜入も屋上のカギをピッキングしたのも大地だし僕は計画を提供しただけなのに……
そんな中学校生活も終わりを迎えた。

高校は、本当はみんな別々のところに行くはずだったんだけど優花の熱心なアピールにより同じ高校に行くことになった。またこの三人でいろいろやっていきたいらしい。僕も大地も高校にこだわりはなかったのであっさり承諾した。けどこのせいで入試前一週間は大地の家で徹夜だった。
なぜか？
大地だけボーダーに届いてなかったのだ。ちなみに僕は余裕で優花はギリギリ（超えていることに変わりはない）だった。
なにはともあれそんな大地もなんとか合格してこの春からまた三人で一緒に学校に通うはずだった。

そんなときだった僕が倒れたのは。
もちろんすぐに病院に運ばれ、身体中くまなく検査を受けた。結果はガン。末期らしいのでもう助かる見込みはなさそうだ。それを聞いた時の周りの反応と言ったら様々なものだった。

大地は十秒間くらい黙った後、「また来るよ。」と言って病室を出た。

優花は医者に泣きついていた。「嘘ですよね。」「嘘って言ってください。」と。

両親は二人とも「大丈夫、助かるからね。」と言って励ましてくれた。いろんな知り合いにも電話して僕が助かる方法を探してくれたらしい。
結局できたのはごくわずかな延命措置だけ。高校の入学式にすら出れないみたいだ。
そんな状態で月日は過ぎた。

そして今に至る。

今病室には僕と大地しかいない。両親に頼んでこうしてもらった。
彼らとしてはきっと僕の最後を看取りたかったのだろう。それでも無理を言ってこうしてもらった。
理由は心配してくれる人には悪いけど静かに逝きたかったからだ。
僕が短い生涯で得た親友と語りながら。

「それで俺を呼んで何がしたかったんだ？　遺言でも聞いてほしいのか？　さっきも今にも死ぬみたいなこと言いやがって。」
大地にも優花にも僕の余命が今日尽きることはいっていない。言ったら優花は何が何でも来るだろうそれだと僕は恥ずかしくてとてもじゃないが遺言を全て残せなくなるしいくら図太いこいつでも普段通りとはいかなくなるだろうからだ。僕は普段通りという幸せの中逝きたいのだ。

「おお！大地にしては鋭いね。正解だよ。」
僕はからかうように言った。

「僕の余命は残り0日。つまり今日中には僕は死ぬんだよ。」

さすがの大地も言葉を失ったがすぐに
「いやそれはない。なぜならお前の親御さんがここにいないからだ。」
と、自信満々そうな顔で言った。

イラッときたから医者からの診断書を見せてやった。

すると
「手の込んだイタズラだな。もうそんな紙一枚じゃ騙されないぞ。」
と、もっと自信満々そうな顔で言った。

「これは本物だって。」
僕は弁解したが大地は
「そんなこと言ってこの前も俺をだましただろう。俺に死ぬほど勉強させやがって。」
と言った。こいつ…まだそのことを根に持っていたのか。あれは大地がボーダーに届いてなかったからしょうがなかったんだ。
そう思い僕が弁解すると
「確かにその時は騙したけどそれは大地のためを思ってだよ…」
大地が声を大きくして言ってくる。身体に響くからやめてほしい。
「嘘だっ。それならあんな喜々として罰ゲームとか考えないはずだっ。」
「いや、まあそれはね…」
「ほら見ろ。だから今回のも嘘だっ。」
そういう大地の顔は必死そうに見えた。こいつの直感は獣並なので本当だと気づいているのかもしれない。
「まあこれが嘘だとしてもいずれ言うことだからさ、今日聞いといても損はないだろう？」
「た、確かにそうだが…」
いつお迎えがくるかわからないし僕は簡潔に大地に言った。
「大地、今までありがとう。大地のおかげで短くてもなかなか楽しい人生だったよ。」
大地が言葉を返す前に続けて言った。
「優花には好きだったって伝えといてくれ。」
大地は少し黙った後、
「俺への遺言はともかく優花へのは直接言わなくていいのか？」
「そんなことしたらガンで死ぬ前に緊張のしすぎでショック死しちゃうよ。」
「別にどっちにしろ死ぬなら変わらなくないか？」
「いや、勝算があったら考えるけど優花はもう好きな人がいるだろうからね、地雷原に突っ込むつもりはないよ。」

適当に言葉を濁しておいた。優花の思いを大地に言ったら来世で優花に殺されるからね。ほんとは、優花は大地が好きなはずだからフラれるの確定じゃん。なんで死の間際でフラれていかなきゃいけないんだよ。って言おうと思ってたんだけどここで来世の命までかけるのは嫌だからね。
そんなことを思っていると大地が僕をかわいそうな馬鹿を見るような目で見てきた。
こいつにこんな目で見られるのはすごい腹が立つ。
「まあ、先に大地が優花に告白するなら考えないでもないけどね。」
もっとも考えたところで実行するまで僕が生きている保証はどこにもないんだけどね
「なんで俺だけ地雷原に突っ込まなくちゃ……お前俺が告白したらお前も面と向かって告白するか？」
なんか大地が妙なことを口走り始めたので
「いいよ、ただし結果次第ではしないけどね。」
彼氏がいるやつに告白とかしたくないし
「よし、わかった。ここでちょっと待ってろ。」
そう言って大地は走って病室を出て行った……あれ？これで大地が間に合ったら僕告白決定？
不味いことになったがどうせ大地の告白を受け入れるだろうから大丈夫だろう。その雰囲気のなか逝くのは気まずい気がしないでもないけど
まあ二人をからかいながら逝くとしよう。
そう思っていると病室の扉が勢いよく開いた。もう来たのか、まだ２０分しか経ってないのに
「おい、告白してきたぞ。次はお前の番だろう。」
そう言いながら大地が優花と一緒に入ってきたが
「え？僕が見てないからノーカウントでしょ。」
僕はメイドの土産として直で告白シーンを見たいのだ。わかりきっている結果に興味はない。

僕の声と重なるように優花が
「え？大地告白したの？誰に？」
と言った。
「優花、なんてことを言うんだ……」
それを聞いて僕が大地をじーっと見ていると
「すみません、嘘つきました。」
大地が観念して謝ってきた。
「けどどうせ結果は変わらないし関係ないだろ。」
大地があほなことを言っている。結果よりも過程が重要なのだ。具体的にいうと告白シーンを見るのが重要なのだ
さらに言うと結果は大地次第でかなり変わるので関係大有りだ。直接フラれるのと間接的にフラれるのではダメージが段違いだ。
「まあ何はともあれ、大地も告白しなかったし僕の遺言はきちんと伝えてくれたまえよ。」
僕をだませなくて悔しそうな大地を微笑みながら見ていると
「ちょっと遺言ってどういう意味？」
優花が口を挟んできた。
「いや、いずれ言うならいつ言っても変わらないかな、と思って」
大地にしたのと同じような言い訳をして優花を納得させようとする。
大地は馬鹿なので簡単に丸め込めるが優花をちょっと面倒だ。ぼろを出すと今日死ぬことがすぐばれる。そんなことになれば僕の静かに逝く計画が台無しだ。
「それでも言っていいことと悪いことがあるでしょう。」
「遺言は言っていいことだろう。僕に遺言を残すなと？」
「いや、そういう意味じゃなくて……」
僕が屁理屈で優花を丸め込む作戦を実行していると
「よし、わかった。ここで告白すればいいんだな。」
大地が大声でこんなことを言い始めた。
そして
「優花、俺はお前が好きだ。」

大地が告白した。
まあ計画通りではないけど告白シーンも見れたし、これで大地と優花二人とも幸せだろうし結果オーライだろう。終わりよければすべて良しだ。
僕が満足していると優花がこちらの方をチラチラ見ている。やはり第三者の前では答えづらいのだろうか。とはいえ僕はもうベッドから動く力は残ってない。
すると優花はあきらめたかのように口を開いた。
「ごめんね。私好きな人がいるの。」
衝撃的な事実を口にした。どういうことだ、優花は大地が好きな人じゃないのか？僕が混乱してると
「知ってたよ」
大地がこんなことを口にした。馬鹿な、こいつが気付いていて僕が気付いていないだって。そんなことはありえない。第一優花は大地に手作り弁当とか持って来てたし、クラスマッチとかのときも必ず大地のチームに応援に来ていた。これで他の人が好きとかあり得るのだろうか、いやありえない。僕がますます混乱していると
「次はお前の番だぜ。」
大地が僕の肩をたたいてそう言った。
すると優花が
「どういうこと？」
と大地に聞いた。
「いや俺が優花に告白したらこいつもお前に告白するって約束したんだよ。」
大地が馬鹿正直にばらしやがった。これではもう僕が優花が好きなことがバレバレではないか。
気持ちがばれているのにいうしかないのか。なんという生き地獄だ。
まあどうせもうすぐ死ぬしいいか
僕が開き直って
「優花、僕は君が好きだ」

大地と同じように告白したが優花は僕に見向きもせず机の上にある紙を凝視していた。僕には答える価値すらないと？さすがにそれはへこむなぁ……
落ち込んでいると
「ねえ…あんたの死亡予測日が今日と同じ日付になってるんだけど、どういうこと？」
げっ、隠し忘れてたか。どうやって誤魔化そう。
僕が言い訳を考えていると
「それはこいつがドッキリ用に作った偽物だ。」
大地がうまいことフォローしてくれた。大地ナイス。
「そう……ベッドから動けないのにこんな物作ったんだ……」
や、やばいばれてる。
「そ、そんなことより僕の告白の返事は？」
「告白？」
どうやら聞いていなかったようだ。まあ話題をそらせただけでよしとしよう。それに答えてくれなかったわけではなかったのには安心した。が、もう一度告白しないといけないのだろうか。大地の方をちらっと見ると吹き出すのを我慢していた。殴りたい……
「だから僕は優花が好きなんだよ」
もう一度言った。フラれるために二回も告白した。泣きたい…
「わ、私は……」
お、さっきと断り方が違う。告白しなれている人は断り方のレパートリーも増えるのだろうか。
もっとも僕は最後まで聞けないらしい。時間切れだ。
「ごめん優花。返事はいいよ。もう時間切れだ。」
僕は口から血を吐いていた。

「さてと、言うことも言ったしもう心残りはないかな。大地、優花、元気でね。」
本当は優花の好きな人が知りたかったけどそれを隠してできる限り

笑って言った。
それに好きな人に看取られているのだから死に方としてはなかなかだろう。
優花の泣き顔が目に入った。泣き顔でもかわいいなぁ。
そんなことを考えているうちに僕の意識は途切れた。

第一話　天国？

僕はふと目覚めた。
が、まだ目は開けていない。何故かというとさっきといってもどのくらい時間がたったかはわからないが遺言まで残しているのだ。別に死にたいわけじゃないけどその中には優花への告白とかあったから非常に目を開けづらい。
けどまあ僕はさっき死に掛けだったからもう死んでしまってここは天国的なところかもしれない、ベッドも病院のよりやわらかい気がするし。が、そんな楽観していては目を開けた瞬間フラれる可能性がある。てか僕は神とか信じていないので必然的に天国の存在も信じていない。つまりは目を開けた瞬間フラれるということだ。病室に二人がいればの話だが。

そんなこんなで１０分ほどベッドの上で悩んでいたが薄く目を開けて様子を見るという画期的なアイデアを思いついたのでそうすることにした。

見た人にばれないように薄く目を開けた。
するとそこには天蓋が見えた。

ここが天国ということが決定した。
僕が入院していたのはどこにでもあるような普通の病院だ。間違ってもベッドに天蓋がついているはずはない。そういえばベッドもさっきよりやわらかい気がするし……

天国ってどんなところなのかな

そう思って寝たふりがばれないように寝返りをうって周りを確認す

ると右手には高級そうな家具や調度品が左手には……見知らぬ女性がいた。髪は綺麗な銀色で、瞳はきれいな蒼色をしている。もしかしたら天使かもしれない、こんなにきれいな人は優花以外に見たことないし…あれそれだと優花も天使だったのか？まあ天使だとしてもかなり大きいと思う。僕は高校生（なり損ねたが）では平均より少し高いくらいの身長だ。この人は僕の１．５倍くらいある。天国にいる人すべてを慈愛的なもので包むにはこのくらい大きくないとダメだったのだろうか。

まあ急に自分よりかなりでかい人を急に見たわけでね、僕が怖がりとかそういうわけじゃないんだけどね、誰でも驚くというかね。思わず声を上げてしまった。

「うわっ」

と。

すると横に寝ていた女性が

「どうしたの？お腹すいた？」

とまるで幼児に接するように接してきた。

僕はそこまで子ども扱いされるほど子供じゃないんだけどな、天使から見れば僕なんて所詮子供にすぎないのだろうか。

そういえばさっきあげた声が妙に高かった気がするな。ボーイソプラノとかじゃあるまいし。

僕はそこで改めて自分の体を見た。

そして気づいた。

なんか縮んでね？と

具体的にいうと幼稚園児から小学校低学年までの間、そのくらいまで縮んでいた。僕が驚いて言葉を失っていると僕が何も反応を表さないのを訝しんだのかこの女性が言葉を重ねた。

「どうかしたの？どこか悪いの？お母さんにいってみなさい。」と。

お母さんにいってみなさい、と言ったのである。

別に僕の母さんは外人さんではない。ふつうの黒髪黒目の日本人だったはずだ。間違っても髪は銀髪じゃないし、瞳も蒼くない。ついでにこんなにきれいじゃない。もちろんそんなことを面と向かって言ったら殺される。

それともみんな神の子だから私の子供同然ですとかそんな考え方なのだろうか、けど死ぬ人一人一人に天使を送る必要はないとおもうんだけどな

僕が混乱していると扉が開く音がした。

そしてそちらのほうから

「どうしたセレス？」

と言いながら高級そうな服を着た金髪の男性が歩いてきた。

この人も天使だろうか、そう思うとこの人も容姿が整っている。

セレスか、そんな名前の天使は聞いたことないなぁ、といっても有名どころ（ガブリエルとかラファエルとか）しか知らないので何と

も言えないが。

女性の方の天使（仮）は
「この子の様子がおかしくて。」
と答えた。

すると男性の方の天使（仮）は
「心配だな。医者でも呼ぶか？」
と見るからに狼狽して言った。

医者という言葉に反応したのだろうか僕は大声で泣き出してしまった。
これは別に僕が泣き虫とかいうわけじゃない。本能が泣けと訴えてきたのである。
それにしても医者か天国なのに病気があるのか、それだと天国じゃないような……

それを見て女性の方の天使（仮）は
「お医者さんはいやみたいよ。」
と、笑いながら言った。

すると男性の方の天使（仮）も
「そうみたいだな。」
と、笑った。

う～ん、ここは天国なのだろうか。根本的な問いをもう一度していた。確かに天使のようにきれいな女性だが天使とは限らない、僕が勝手に思い込んでいただけだ。それに天国なのに病気があるのは矛盾している気がする。となるとここは天国じゃない？そうなるとどこだろうか、身体も縮んでいたし

今の自分の状況について僕が珍しく頭をひねっていると男性（やっぱり天使ではない）が
「その子が泣き止むまで私もそばにいよう。なんたってお父さんだからな。」
と続けた。

お父さんだからな、と続けた。

僕の父さんもやっぱり金髪ではない。黒髪黒目の日本人だ。

ここが天国じゃない以上は知らない人が僕の母さんと父さんを名乗っていることになる……これは病院に行ったほうがいいのだろうか？それとも彼らに病院をすすめたほうがいいのだろうか？
そんなことを考えながらベッドの上を寝返りしながら動いている（ここで急に立つのは不自然だし）と一瞬の浮遊感、そして直後に床に落下した。すごく痛い……ことはなかった。絨毯がすごくやわらかくて助かったようだ。

絨毯の上であぷあぷしていると金髪の男性が
「ソラはやんちゃだなぁ。」
といいそれに女性は
「あなたに似たんじゃないの？」
と笑いながら言った。

どうでもいいが僕の心配もちょっとはしてほしい。人は高さが３０センチもあれば落ちて死ねるのだ。さっきまでは僕の心配をしていたのにどういうことなのか。

そのまま二人は歓談しているが僕はベッドに持ち上げられた後放置

されている。だんだん蔑にされていっている気がする。逃げようにも上手く身体を動かすことができない。縮んだからだろう。
どうしよう、なにもできない。
そう思っていると睡魔が襲いかかってきた。
再び途切れ行く意識の中、これが夢じゃないなら転生とかいうのをしたのかもな…と思った。

第二話　状況確認（前書き）

説明回です

第二話　状況確認

結果からいうと……転生してました。はい。

僕の意識がはっきりしてから（また起きてから）転生していることはすぐに分かった。だって家の中で当然のように魔法を使っているんだもの。この前なんて生きてる豚らしきものを一瞬でこんがり焼いていた。僕がそれを見て年甲斐もなく（まあ６歳なんだけど）はしゃいでいると母さんや使用人たちからほほえましい目で見られた。まあその時点で普通に転生どころか異世界に転生したのは確信した。てかさせられた。

そのあと本を読んでもらったり（もちろん絵本だ）、母さんたちから話を聞いてこの世界のことがいろいろわかった。

この大陸はヴァーニア大陸というらしい。国は大国が４つと小国がいっぱいあるらしい。

その４つの大国の名前は

僕たちが住んでいるアマルティア王国、王制だが今代の王は人格者なので反乱とか革命とかの心配はないらしい。

次にオルトルート帝国、ここもやっぱり王制だ。いや帝制というべきか……ここは軍事力に秀でている国でアマルティア王国と戦争したら単純な国の軍だけでは帝国が圧勝らしい。それでも戦争がはじまらないのは理由があったりするがそれはおいおい話すとしよう。

そして３国目はハルモニア教国。文字通り宗教国家だ。ハルモニア教（まさに名前通り）を信仰している国で宗教のトップ、総代主教とかいう人が一番偉いらしい。

そしてエルフやドワーフといった異種族たちが暮らしている魔王領だ。

え？魔王領は国じゃないって？

僕もそう思ったけどそんなことはないらしい。

なんでも約二百年前までは人間ｖｓ異種族で争っていたらしいがある予言がきっかけで終了したらしい。
その予言はなんでもこのままだと約二百年後には世界は人類（異種族含む）は破滅を迎えるというものだったらしい。それで当時の王様たちや魔王は大慌て。
すぐに平和条約を結びいずれ来るという破滅に備えて国力の増強を図った。このおかげで国々の争いは回避されている。
今までいがみ合っていたのも忘れて中立を保っていた教国に優秀な騎士や魔法使いを育成するための学園までつくり世界中の才能ある子供たちを種族問わずそこに集め、育成を開始した。
その際に異種族が一か所に集まって街を作り魔王がそこを治めているのだがあまりにも規模が大きすぎるため国扱いされている。
ちなみに教国が戦争で中立を保っていたのはなぜか。どちらかというと真っ先に異種族を弾劾しそうなイメージがあったので母さんに聞いてみると、神様も異種族だから彼らへの弾劾はそのまま自分の国そのものを弾劾することになるから中立だったらしい。まあ言われてみれば神様も異種族なんだけどひとくくりにするのはそれはそれで失礼だと思う。
気づいたかもしれないが約二百年前に約二百年後の予言が下された。予言を下したのはその当時の教国の巫女だ。予言の誤差はその予言の開始までの時間の１割前後、これで言うと２０年の誤差がある。
まあ今がまさに予言のど真ん中である。
だからと言って僕にはどうしようもないのでのんびり暮らしている。
その予言が眉唾ものという説もあるので是非ともその可能性にかけたいと思う。
まあ僕が新しく生きることになった世界はあまり後がないらしい。
破滅する前にもっと異世界らしいところを満喫したい。

時間については元の世界より一年の間隔が長いようだ。この世界では一年は２８日×の１８か月だ。

呼び方は白の一月、白の二月…白の六月、あと灰の月と黒の月も六か月ずつあるらしい。
なんでこの呼び方かというと年の初めは穢れとやらがないけど時間が経つにつれてだんだん溜まっていくからだそうだ。
多分宗教関係の理由だろう。

もっと身近なところでの変化はこの世界独特というわけじゃないけどこの家には使用人がいる。しかもたくさん。執事とかメイドさんとか料理人とか庭師とか。いやまあ使用人の存在自体は不思議でもない。この世界の文化水準はおそらく中世ヨーロッパと同じくらいだからだ、メイドさんたちの話を聞いたところ奴隷もいるらしい……もちろん盗み聞きだ。奴隷なんて教育に悪いもの教えてくれるわけがない。それに僕としては奴隷がいようがいなかろうが僕の生活には直接関係しなさそうだからとくに興味はない。
それで僕の家に使用人がたくさんいることについてだったけど、どうやら父さんは貴族らしい。しかも三大貴族とかよばれているうちの一つらしいからこれでもむしろ少ないほうらしい。どんだけーって話である。
ちなみに他の三大貴族はオルレアン家とネルトゥス家だ。
そんな感じで三大貴族とか父さんたちは呼ばれてるわけでものすごく偉いらしいけど僕の前ではそんな威厳なんて欠片も見せたことがない。どこからどう見ても親馬鹿にしか見えない。ほしいものはたいてい買ってくれる。まあほしいものなんてほとんどないのが現状なんだけど。
そんな父さんの名前はアラン・ルビンシュテイン。
そして母さんの名前はセレス・ルビンシュテインだ。
それから僕には兄がいる。年はかなり離れていて１２歳らしい。名前はゼノン・ルビンシュテイン。
兄さんも僕に甘い。
ほんとは他にも称号やら過去の家名やらが延々と続くんだけど覚え

きれなかった。
僕の新しい家族はこんな家族構成だったりする。
使用人さんたちも実質家族のようなものだけどね。
他にも従妹とかいるし兄さんの婚約者もいるけど日常的に会うのは今の3人だ。
……兄さんの婚約者は普通に可愛かった。彼女も僕に甘いけど彼女はどちらかというと僕を愛玩動物のように思っている節がある。この前なんて着せ替え人形にさせられて男物だけならまだしも女物まで……
あの記憶は黒歴史として厳重に記憶の奥深くに封印したい。

まあそんなこんなで転生したことを理解して僕が何をやっているかというと……魔法だ。
やっぱり少年の夢っていうかね、心が躍るものがあるというかね。
とにかく暇さえあれば母さんや父さん、兄さんに魔法を教えてもらっている。一回メイドさんに聞いてみたが教えてもらえなかった。なんでもルビンシュテインの子に教えられるようなものではないといわれた。どういう意味だろう。
それはともかく僕の魔力は一族の中でもトップレベルに高いらしい、父さんが自慢げに話していた。
ということで魔法を習っているんだけど、魔法は危険だし僕の魔力ならなおさらということで今は正しい魔力の出し方といろんな魔法の使い方、つまり詠唱する呪文や空中に描く魔法陣について勉強して、父さんから許可をもらうまで使ったらダメだって言われた。
この世界の魔法は様々な発動方法があるらしい。呪文を詠唱するのもあれば、空中に魔法陣を書くのもあるし、すごいところまでいくと指を鳴らしたりするだけで発動できるものもあるらしい。すごいかどうかは微妙だけど舞的なもので魔法を発動する民族もあるらしい。
発動できるものにもいろいろなものがあるらしい。その中でもポピ

ュラーなものは火を出したり風を起こしたりする属性魔法だ。けどそのスケールが上がると落雷まで呼び寄せられるようになるらしい。他には無属性魔法というものがある。これは属性魔法に区別できない特異な魔法をそう呼ぶらしい。治癒魔法や浮遊魔法（魔力で浮く魔法だこれとは別に風属性の魔法でも浮けるので無駄ともいえる）などをそうよぶらしい。

少年の夢をかなえるためにも早く父さんに許可をもらいたいと思う。

僕の新しい世界は大体こんな感じだ。

え？僕の名前？

僕の新しい名前はソラ・ルビンシュテイン転生したての６歳児だ。

第三話　貴族（前書き）

サブタイトルつけるの難しいですね
今回などほとんど関係しておりません。
参考程度にしていただけると幸いです。

第三話　貴族

転生したことに気づいてからもうすぐ三年経つ。

父さんも母さんも優しいし、兄さんも僕とよく遊んでくれる。前世より家族との触れ合いが充実している気がする。

けど父さんたちはいまだに僕に魔法を使わせてくれない。

なんでもきちんと制御できるような知識と精神が備わるまで使わせてくれないらしい。

だからひたすら魔法の知識を取り込んでいる。途中で文字が明らかに今使ってるのと違う魔法も勉強させられた。ほかの国の魔法だろうか。

そういえば最近最近気づいたんだけど僕はこの世界の文字が読めるらしい。当然過ぎて全く気付かなかった。多分僕の意識がなかった6歳までの間に体に染みついたんだと思う。

僕にとっては便利だから構わないけど。

けど僕も毎日毎日魔法の勉強をしているわけではない。

護身術として一通りの格闘技と剣術なども習っているし、たまに兄さんに遊んでもらったりもしている。

貴族としての礼儀等はいずれいやでも覚える時が来ると父さんが後回しにしてくれている。

今僕が何をしているかというと……兄さんに遊んでもらっています。

なんか兄さんが魔法でドラゴンを作り出してくれたのでそれに乗って遊んでいる。他にも鳥とか何故か空飛ぶ魚とか作ってもらってるのでそれをドラゴンに乗って捕まえようとしてるんだけど……追い

つかないんだよね。僕が重いのかと思って試しに降りてみたら次の瞬間にはドラゴンの口に鳥や魚が納まっていた。ダイエットしようかな…そんなことを考える9歳児だった。
そんな感じであれこれ二時間くらい（体感）で遊んでいるとメイドさんが僕たちを呼びに来た。
もう夕食の時間かと思っているとそうではなく父さんが呼んでいるらしかった。なんでも来週開かれる貴族のお披露目パーティーについていろいろ言うことがあるらしい。
貴族は9歳になるとお披露目パーティーというものをやるらしい。正確には9~１2歳の貴族の子供を集めてお披露目パーティーをやるらしい。
僕に言うこととかあるのかなぁ～と思いつつ父さんの部屋へ向かった。

父さんの部屋に行くと
「今度パーティーがあるのは知っているだろう」
「うん、知ってるけど……」
「そこではお前と同世代の貴族の子供たちが集まる。」
「それがどうかしたの？」
「つまりお前と同世代の女の子も集まるわけだ。」
嫌な予感がする。
「お前、貴族がどうやって結婚するか知ってるか？」
まさか
「今度のパーティーでお前との婚約がおそらく……いや、間違いなく申し込まれる。」
やっぱりか。いやまあ前世の漫画とかでもそういうのはあったけどまさか自分がまきこまれるなんてなあ。
「なんで？」
愚問だとは思うけど一応聞いてみる
「お前と結婚すれば三大貴族の縁者になれるからだ。早い話政略結

婚というやつだ。」
「僕は恋愛結婚がいい。」
僕は即答した。そんな道具みたいに使われるのもいやだけど顔も知らない人と結婚するなんてもってのほかだ。
「そういうな。貴族の子供は大体このパーティーで婚約して結婚するんだ。」
父さんは僕をなだめるように言った。
「じゃあ父さんも母さんとは政略結婚だったの？」
僕が聞くと
「いや父さんたちは恋愛結婚でもあり、政略結婚でもあったな。」
「どういうこと？」
「いやそのままの意味だよ。恋愛して愛を誓った相手が婚約者だったって話だよ。」
なんて羨ましい。僕だってそんな感じがいい。愛を誓い合ってから結婚したい。そのためにはどうにか断らないと。
「僕の要望もちょっとは取り入れてくれるの？」
「大事な息子の一生にかかわることだし、多少のわがままくらいなら聞いてやるぞ。」
「じゃあ僕の条件をのんでくれる娘ならいいよ。」
「どんな条件だ？」
「一夫多妻制ＯＫで別の貴族と二人組以上でくること。」
これなら僕と婚約して得られるメリットが少なくなる。メリットがなければ僕と婚約しようなんて話は出てこないだろう。
「お前妙なところで賢いな。とりあえずそれは搦いとくとして一夫多妻制なんて教育に悪い言葉誰が教えたんだ？」
あれ？話が変な方向に……
「誰が教えたんだ？アシュリーか？ルーナか？それともターシャか？」
どうやら僕が教育に悪い言葉を知っていたのが気に食わないらしい。愛されてるのは嬉しいけどここまで行くとちょっと…

それはそうとして今出てきた名前はみんなこの家のメイドさんの名前だ。他の庭師さんとかの名前が出てきてない。
「なんでメイドさん限定なの？」
「女性の方がそういう話をしそうだからだ。で誰だ、誰が教えたんだ？」
僕がこの言葉を知ってるのは当然前世の知識からだ。誰に教えられたわけでもない。
「教えた人をどうするの？」
「当然何か罰ゲームを……」
こんなことでアシュリーたちに迷惑をかけるわけにはいかない。みんな僕には優しいんだ。お菓子とかくれるし。
「本だよ、本で読んだんだ。」
それっぽい嘘をつくと
「なんて言う名前の本だ？探し出して焼いてやる。」
どうしよう。本の名前なんてわかるわけない。そもそも本を読んで知ったんじゃないんだから。
「それはともかく僕は絶対婚約は嫌だからね。」
「どうしてもか？相手がいなくなるかもしれないぞ。」
うっ、それはつらい。けど現実味のある話だ。この世界では平民と貴族の身分を超えた愛なんて絵空事だ。だって平民と接する機会がない。僕が接したことのある平民はこの家にいる使用人たちだけだ。くっ、愛のない結婚も嫌だけど愛以前に結婚できないのも嫌だ。どうすれば……
僕が心の中で葛藤を繰り返していると
「どうしても恋愛結婚がいいか？」
父さんが聞いてきた。
「もちろんだよ。」
そりゃできるならそっちがいいに決まってる。
「父さんに考えがあるが聞くか？」
「聞く聞く」

いったいどんな考えが
「ひとまず明日くる話は全部断っておこう。そしてお前は今度のパーティーで好きな子を作れ、そしてその子と仲良くなって付き合え。そしてその子にこちらから婚約を申し込めば完璧だ。」
父さんの会心の案。多分兄さんがやるなら一部の隙もない完璧な案だろう。しかし僕がやる場合は完璧ではない。なぜなら過程に僕が女の子を口説き落とすというものが入っているからだ。自慢じゃないが前世では死ぬ間際にフラれた男だ。ハードルが高いどころの話じゃない。全裸で鉄の処女（アイアンメイデン）に入って無傷で生還するくらいの話だ。要するに不可能だ。
とはいえ僕が恋愛結婚するにはそれしか方法がない
「わかったよ。そうする。」
僕が観念して言うと
「大丈夫だ。お前が最後の、12歳のパーティーまでに誰と婚約したいとか言い出さなかったら父さんが婚約を結んどいてやる。」
父さんの優しさが心にしみる……尤も実質出来レースなわけだが……
僕が何とも言えない気持ちで黙っていると沈黙を了解と受け取ったのか
「じゃあそういうことにしよう。」
僕にもう打開策なんてないので
「うん……」
と返事するしかなかった。まあ結婚できないことはなさそうだし良しとしていいのかな。良しということにしよう。良しだったらいいなあ……
僕が気を落としているのに気が付いたのか父さんはちょっとの間考えた後
「そう落ち込むな。代わりと言ったらなんだがパーティーの日が終わったらそのご褒美ってことで次の日は魔法を使おうか。」
「父さんが？」
魔法を見るくらいなら母さんたちに頼めばいつでもできるんだけど。

「まさか、お前がだよ。」
父さんが笑いながら言った。僕は父さんを二度見した後
「つまり僕に魔法を使う許可をくれるってこと？」
ちょっと興奮気味になりながら聞いた。なんたって念願の魔法だ。
「そういうことだ。」
ついにソラ・ルビンシュテイン魔法デビューだ。
「ありがとう」
思わず父さんに言ってしまった。
「ああ……」
父さんは照れながらそう言った。
「用事って婚約の話だけ？」
思い出してしまい気持ちが沈んだ僕が聞くと
「ああ、そうだ。」
と言われたので僕が部屋から出て行こうとすると
「あ、ソラちょっと待て。まだ用事があった。」
父さんに呼び止められた。
なんだろうと思い戻ると
「お前に悪影響を及ぼした本のタイトルを教えて行ってくれ」
誤魔化し切れてなかったらしい。延長戦に突入するようだ。

結局辞書で適当にページを開いたらそんな言葉があったから覚えた。
という苦しすぎる言い訳を何とか通した。僕の言い訳に使われた哀れな辞書は焼かれ、次の日父さんが焼いたものと全く同じ辞書を買ってきていた、。焼いた意味はあったのだろうか？

それからお披露目パーティーまではずっと礼儀作法やダンス、服の寸法を測るなどのことで忙しくて他のことについて何かやっている時間はなかった。今年のパーティーの会場には僕の家を使うそうなので父さんは準備やらなんやらで忙しかったため母さんやメイドさんに礼儀作法とかを教えてもらうことになった。母さんたちは優し

いから楽かなと思っていた。
結論としてその考えは甘かった。
そこで母さんやメイドさんの違う一面を見てしまった。
メイドさんはテーブルマナーでもいつもなら見逃してくれるようなことを見逃さずに
「退席するときは椅子をちゃんと入れてください。」
と言葉も敬語で顔も別に怒っているわけではないのに後ろからオーラのようなものを出して言われた時はは泣くかと思った。
ダンスでは母さんが
「そこはステップが逆よ。」
メイドさんとは違い怖くはないが厳しかった。具体的にいうとできるまでやらせるタイプだった。初日なのに一通りできるまでレッスンは終わらなかった。最後の方は足が痛くて仕方がなかった。

何の練習でもきつかったので手を抜きたかったけどそもそも教官（母さんやメイドさん）がそんなこと許してくれなかったし、なにより父さんが言ったこのセリフだ。
「マナーが良かったりダンスが上手な子はもてるぞ。」
前世ではモテなかった僕だけどここではモテられるかもしれない。
という希望と12歳までに誰かと付き合わなけらばならないというリミットが僕に手を抜くことを許さなかった。尤も前半は父さんに騙された可能性も否定できないけど……
そんな切羽詰まったような希望に満ち溢れたような微妙な状態でパーティーまでの時間を過ごした。

第四話　パーティー

僕の誕生日パーティーは子供(ぼく)たちが眠くなるという理由から夕方の６時ごろからのスタートとなる予定だ。主役が寝るのは避けたいのだろう。名目上はお披露目パーティーだからね。もっとも眠くなるという理由には、子供をなめるな……と言いたいところだけど１０時には眠くなるのだから仕方がない。だってテレビとかないんだもん。

パーティーがもうすぐ始まるということで僕も父さんと兄さんに連れられて会場（まあ僕の家なんだけど）に入った。
会場には大人だけでも百人を超すような人数がいるみたいだ。その子供まで合わせると優に二百人は超すだろう。

パーティーが始まった。

まず父さんが主催者ということで来てくれたことに対する謝辞を２０分ほど、それから今日ここに来れなかった貴族たち（子供の年齢が条件を満たしていない人だ）からのメッセージをかれこれ３０通ほど、これでも厳選したものを読んだというのだから驚きだ。例年ならもうちょっと少ないらしいが今年は僕たちルビンシュテイン家や他の三大貴族の家も参加するらしいのでしょうがないらしい。
これらを合わせると１時間半はあった。僕はその間父さんの横で集まった貴族の方をみながら営業スマイル、僕に何をやらせたいのか？苦痛のスマイルタイムが終わり僕が父さんのそばにいると今度は一人一人父さんに挨拶に来た。さすが三大貴族が一角、けどまあ今回はお披露目パーティーなわけで僕だけ勝手に離れるわけにもいかずていうかむしろ僕がいないといけなかった。父さんもどうにか僕を

解放しようと頑張ってはいるみたいだけど残念ながら結果はよくない。時折くる質問に答えながらやっぱりスマイル。質問が来るとき以外は暇なので父さんたちの会話を聞いていると、その中に父さんの予想通り婚約の話が多数持ち上がっていた。僕はその話が来るたびに平静を装いつつも冷や冷やしながら聞いていた。父さんが断るたびにそれに一安心しつつも挨拶に来る貴族の相手をすること1時間。思ったこととしては貴族が連れてくる子はみんな可愛かった。これは断らなくてもよかったかな。と軽く後悔した。

とはいえまだまだ先は長い。

次の相手を見た瞬間父さんが今までの貴族相手にしていた営業スマイルをといた。（僕だけ営業スマイルというわけではない）

その相手は赤い髪をした父さんと同じくらいの年の男だった。

何事かと思っていると父さんが説明をしてくれた。

「彼はレイモン・オルレアン、私の親友だ。」

そう言いつつ父さんがレイモンさんの肩を叩くと彼も

「よろしく、僕がレイモン・オルレアンだ。」

と自己紹介をしてきた。

オルレアンといえばルビンシュテインと同じ三大貴族の一角だ。

父さんが僕にも自己紹介を促すので僕も

「ソラ・ルビンシュテインです。」

と自己紹介した。

するとレイモンさんは僕は気付かなかったが彼の後ろにいる僕と同じくらいの女の子に同じように自己紹介を促していた。

赤い髪をした可愛らしい女の子だった。

彼女は怯えた感じで（僕の顔が怖いわけではない……と思うけどなぁ）

「わ、私はレティシア・オルレアンです」

と自己紹介をしてくれた。

「ソラ、レティシアちゃんと遊んできたらどうだ？」

父さんの渡りに船な提案に僕は元気よく返事をした。

「うん。」
僕としてはこの状況から解放されればどうでもよかったのだ。
「行こう、レティシアちゃん。」
僕は彼女の手を引っ張って歩いた。

「どこに行くんですか？」
レティシアちゃんが聞いてくる。
そういえばどこに行こう……
あの状況から抜け出したくて行先なんて考えてもなかった。
僕は苦し紛れに
「おいしいものを食べに行こう。」
食べ物で釣ろうとした。汚い大人のやり口だが背に腹は代えられなかったし、単純にお腹もすいていた。
そういっていろんなテーブルの食べ物を食べて回った。
その際いろんな貴族に話しかけられ、食べ物を進められた。これは賄賂というやつだろうか。
けどくれるものは全部おいしかったので遠慮なくもらった。
僕に負けず劣らずレティシアちゃんもよく食べていた。僕と同じ立場である以上彼女も同じようなこと（営業スマイル）をして疲れたんだろう。
レティシアちゃんも最初は無口だったがだんだん「おいしいですね」とか言ってくれるようになった。笑っている顔が可愛くてつくづくこの世界の女の子はレベルが高いと思った。

そんなこんなでレティシアちゃんとも打ち解け、二人で会話しながら食べ歩きをしていると二人組の男の子と女の子が話しかけてきた。男の子も女の子も金髪で整った容姿をしていた。僕もこんな容姿だったらモテただろうに……
「何をしているの？」
「せっかくのパーティーなんだからもっと別のことしたらどうなん

だ？」
余計なお世話と言いたいところだけど僕もパーティーすることじゃないとは思う。
「食べ歩きだよ、パーティーっていつもよりおいしいものばかりだし。」
「食べ歩きしてるなら暇なんだろ。俺たちと一緒に遊ぼうぜ。」
レティシアちゃんの方を向くと食べるのに夢中で気づいてなかった。
そんなにお腹がすいていたのか。
まあ僕と同じような目にあったのだから仕方がないとは思うけど。
「いいけどなにやるの？」
「探検だよ探検、どうせここにいてもつまらないしそっちの方がおもしろいじゃん。」
男の子が言った。
この子は自分の家を探検しようと僕に言っているのだろうか？僕が誰だか知らないのだろうか。（さっき前で父さんの横にいたからそう思うだけで僕がうぬぼれてるわけじゃない）
僕が黙っているとレティシアちゃんが
「やりましょう！」
と珍しく大きな声で言った。そんなに僕の家を探検したいのだろうか？面白いものなんてないのに。
僕も別に異存はなかったのでこの二人を加えた４人で僕の家を探検した。
金髪の男の子はやけに勘が鋭くて僕も知らないような隠し部屋とか隠し通路とかを発見していた。
女の子の方は怯えた様子もなく堂々と進んでいっていた。
それに比べレティシアちゃんは……後ろから音がして僕の前にまわって、前から音がしたら僕の後ろに隠れていた。
僕を壁にしたところで障子紙レベルで無駄と思うけど……
探検ではみんなで父さんの部屋や兄さんの部屋にも入った。身内だから不法侵入じゃない。

僕はその間驚いたフリや初めて見るようなフリをしていた。
営業スマイルよりはましだから良しとしよう。
それに同年代と（僕は微妙だけど）話すのはやっぱり楽しかった。

探検も終わり、会場に戻ってくるとなんだか会場が騒がしかった。
何事かと思っているとどうやら貴族の子供をさらいに来た賊がいたらしいが、なかなか子供だけの集団が見つからずうろうろしているところを見つかったらしい。しかも話しかけられただけで見つかったと勘違いして自分から正体と目的を明かしたらしい。
なんて馬鹿な奴だろう。

賊が逃げ遅れた子を捕まえ
「この子を返してほしければ身代金３０００万を持ってこい。」
捨て台詞をはいて逃げようとした。
なかなか速い。どのくらい速いかというと僕の目には影しか映らないくらい速い。
執事さんたち（警備も兼ねている）は人質がとられているのでうかつに行動できていなかった。
周りの貴族もそのようだった。
そこに父さんが賊の前に出て足を踏み鳴らした。
すると賊の手足を拘束するように魔法陣が描かれそれだけで賊の手足は氷で拘束されていた。
賊が抱えていた子供は腕の中で今がチャンスと分かったのだろう。
腕の中から子供特有のすばしっこさで脱出して親の元へ走っていた。
その子が簡単に抜け出せたのはひとえに賊が拘束された恰好が格好だからだ。
氷で手が拘束された際に手が前に回っていてあたかも手錠を付けられた罪人のような状態だったのだ。父さんはここまで考えていたのだろうか。
それともこうなるような魔法も発動していたのだろうか

父さんは何事もなかったように
「捕えろ」
と言った。
父さんが言うと執事さんたちが賊を連れて行った。
彼はどこに連れて行かれるのだろう。まあ僕には関係ないし別にいいか。

その様子をみているとギャラリーのあちらこちらから
「さすがは魔を統べる一族、格が違いますな。」
「あれだけの動作で魔法を発動するなんて……」
などと聞こえてきた。魔を統べる？いったいどういう意味だろう。
明日にでも聞いてみよう。
僕としては魔を統べるっていうのも気になったけどあの賊は身代金の受け渡し場所とか言ってなかったけどどうするつもりだったのかの方が気になった。

まあそんなハプニングもあったけどパーティーも無事終わり、三人ともお別れの時が来た。
交友の少ない僕（友達が少ないのではなく機会が少ないんだ）には新鮮なもので本来の目的を忘れるくらいたのしかった。来年頑張ろう。
「また遊ぼうね、レティシアと……」
言葉に詰まった。そういえば僕はこの二人の名前を知らない。
「ああ、名前を言ってなかったわね。私の名前はシルヴィア・アマルティア、この国の第一王女よ。」
「同じくリチャード・アマルティア、第一王子だ。」
二人はどうやら王族だったようだ。しかも二人とも第一王子と第一王女だ。この国は王位継承に性別は関係ないので二人のうちどちらかが王位継承とかするんじゃないだろうか？気軽に接していい相手

なのだろうか？
横ではレティシアちゃんもあわてていた。
二人とも急いで姿勢やらなんやらを直そうとしていると
「別に態度はそのままで構わないわ。公の行事ならともかくここはプライベートな場よ。気軽にシルヴィアと呼んでもらって構わないわ。」
「俺もだ。こんな時までかしこまられると調子が狂う。」
二人ともそう言うので
「わかったよ。またね、レティシアちゃん、シルヴィア、リチャード。」
「うん、さよなら」
「ええ、また遊びしょう、ソラ。それにレティシア。」
「おう、またな」
そう言って三人ともどこかへ（おそらく保護者の方へ）去って行った。

まあめんどくさかったけど友達もできたしよかったかな。
そんな感じでお披露目パーティーは終わった。

第五話　魔法

さあ今日は待ちに待っていた魔法を使える日だ。
日が昇るのと同時に起きて父さんの部屋へと向かった。
すると父さんは
「魔法はお昼からにしよう、大きな音を出したら周りに迷惑がかかる」
ともっともらしいことを言っていたが顔は眠たいと雄弁に語っていた。早く魔法が使いたいのに……
仕方なく僕はお昼までずっと今までに勉強した魔法のことについて復習していた。

昼ご飯を食べ終わると父さんが
「よし、ソラ、魔法を使いに行くぞ。」
と隠し部屋の一つである無駄に広い地下室に案内してくれた。

隠し部屋に向かってる最中、昨日気になったことについて聞いてみた。
「父さん、魔を統べるってどういう意味？」
「そのことか……それも含めて部屋についたら説明しよう。」
そう言って父さんはまた黙々と歩き出した。

部屋につくと父さんは
「さあ今から魔法を使う、というより今日から魔法を使う許可をやるわけだがお前にいろいろ言っておかないといけないことがある。」
「言っておないといけないこと？」
なんだろう？この期に及んで許可を取り消されたらさすがの僕でも怒るけど。
「ああ、この一族に生まれた責任ともいえるな。」

父さんはいつになく真剣な表情で話し始めた。そんなに重要なことなのだろうか。
「私たちの一族が魔を統べると呼ばれるのは一族のものが皆すべての属性の魔法を使うことができ魔力、魔法技能も普通の人よりもずば抜けて高いからだ、と世間では言われている。
だが実際は違う。それは魔を統べるという言葉から事実を知らないものが推測したに過ぎない。もちろん、事実でもあるがな。
ソラ、お前は魔法がどうやって創られるか知っているか？」
「知ってるよ。すごい魔法使いの人たちが少なくとも十年以上の時間をかけて創られてるんでしょ。」
どんな魔方陣を作れれば作りたい魔法が発動したいのかを研究し、わかったら実際に発動してみる。その繰り返しで完成するらしい。
もっとも１０年かけても新しく生まれるのは初級魔法レベル。中級魔法レベルなら数十年、上級魔法なら百年近くはかかる。
「ああ、正解だ。」
「それがどうかしたの？」
「魔を統べるというのは一族の直系が受け継ぐ才能、いや、能力というべきものから名づけられている。それは魔法を創りだす能力だ。」
「え？魔法は時間さえあれば優秀な魔法使いなら創れるんじゃないの？」
魔法を創る才能は魔法の才能があれば誰にでも一応はあると思うんだけど…
「確かにそうだが、私たちは魔法によってどのように何がしたいか思うだけでその魔法の使い方が自然とわかる。もっとも、使いたい魔法が大掛かりであればあるほど詠唱時間が長くなるなり、魔法陣が大きくなるなり何らかの形で時間がかかるようになるがな。他にも魔法によっては魔力をかなり使うが私たちの一族、ましてやお前ならよほど大掛かりなものじゃなければ問題ないだろう。
この能力は悪用しようとすれば国を揺らがすくらいのこともできる。

これがお前に言っておかなければならないことだ。」
父さんの長い話が終わった。途中から聞き流そうかとも考えたけど頑張って耐えた。
「大丈夫だよ、そんな悪いことはしないよ。」
僕が答えると、
「そうか。じゃあ魔法を使うか。そうだな、まずは各属性の初級魔法を使ってみてくれ。」

魔法の使い方は簡単だ。魔法陣を作り出せばいい。作り出す方法は千差万別で呪文を詠唱したり直接描いたりと、魔力を込めてそういう動作をすれば魔法陣が出現し魔法が放たれる。
僕は言われたとおりに火の初級魔法、「火の玉（ファイヤーボール）」を発動するための魔法陣を描いた。
初級魔法は全部「〜玉」だ。イメージがしやすく扱いやすいからだ。
描き終えると魔法陣から直径一メートルくらいの真っ赤に燃え盛る火の玉ができた。
「魔力の込め過ぎだな。普通ならもっと小さい。」
と父さんにダメだしされたが、僕としては初めて魔法を使ったという感動（？）でそれどころではなかった。
浮かれながらも他の水、風、雷、土、光、闇と魔法を使っていった。どれも浮かれていたせいか基準より大きいものができて父さんがあきれていたが、気にしないことにした。

一通り使い終わると
「よし、何か適当に魔法を創ってみろ。感覚で創れるとはいえ魔法を創る経験をしといたほうがいいからな。」
父さんからこう言われたのはいいがどうしよう。三年間もひたすら魔法について勉強していたので知らない魔法なんて公に公開されてるようなものはほとんど知っている。

僕が頭をひねって考えていると、父さんが
「別に自分で思いついたものでもいいぞ。」
と助け舟（？）をだしてくれた。
とはいえそんな簡単に思いつくものでもないしどうしよう。
そういえば兄さんが生き物っぽいやつを造ってたことを思い出した。
あの魔法は発動の仕方知らないなぁ。あれはやっぱり兄さんが造った魔法なんだろうか。
まあ発動の仕方を知らないという意味では条件を満たしているのであれにしよう。
魚にするか、鳥にするか、ドラゴンにするか……やっぱりドラゴンだよね。
早速発動しようとすると手が自然と魔法陣を描いていた。
魔法陣が完成し、魔法が発動した。
魔法陣から兄さんが造っていたのと同じドラゴンが出てきたが、やはり魔力を込め過ぎたんだろう。すごいでかい。
ドラゴンはこの無駄にでかい地下室―（２５メートルプールが４つくらいの広さ）の実に半分を占拠していた。
僕が慌てていると、父さんがやっぱりか、みたいな顔で
「魔法を創るのは制御が難しいからな～」
と言いつつ魔法陣を描いていた。
父さんの魔法はすぐに発動してドラゴンを消し去ってしまった。
僕が賞賛の目で父さんを見ていると
「このくらいお前も簡単にできるようになるよ」
と笑いながら言った。
「魔法も作ったわけだしここからは自由に魔法を使っていいぞ。この部屋は上級魔法くらいなら食らっても壊れないからな。ただ古代（ロスト・マジック）魔法は使うなよ。あれを使うとこの部屋どころか屋敷までふっとびかねん。」
この部屋はそんなに頑丈なのか。
それにしても古代魔法（ロスト・マジック）ってなんだろう。僕はそんなもの習った覚え

はないのだけれど。
「父さん、古代魔法(ロスト・マジック)って何？」
「ん？セレスが説明しなかったか？」
説明どころか名前を聞いたのすら初めてだ。
「されてないけど。」
「そうか。古代魔法(ロスト・マジック)というのはその名の通り今はもう失われたとされる魔法だ。」
「魔法が失われるなんてあり得るの？」
そんな消費期限じゃあるまいし
「いや、ありえない。」
「じゃあなんで？」
「古代魔法(ロスト・マジック)というのは魔力の消費量が大きすぎたり発動が難しすぎて使える人がいなくなった魔法のことだ。一応書物などには残っていたが二百年前の戦争でその書物もほとんど焼け落ちてしまった。」
「そんなの僕が知ってるはずがないじゃん。」
実質使うの不可能じゃん。
「ルビンシュテイン家は古代魔法が使えたからな。伊達に魔を統べるとは言われてないからな。先代たちの書いた書物に残っているし、この家には戦争で焼け落ちなかった書物もあるからな。」
そんな馬鹿な。どれだけこの家は魔法にたけているんだ。
「けど僕そんなもの読んだ覚えないけど。」
「おかしいな、なんか今の文字とは違う文字で書かれたやたらと古い本を読まなかったか？」
……
そういえば外国語かな～とか思いつつ読んだ本があった気がする。
そういえばあの本に載ってたやつも上級魔法と同じかそれ以上に複雑なものばっかりだったな…
「読んだかも……」
「それだ、その本に載ってたのが古代魔法(ロスト・マジック)だ。」
なるほど。あの本に載ってたのが古代魔法(ロスト・マジック)なのか。

ん？けどなんで上級魔法は大丈夫なのに古代魔法（ロスト・マジック）はだめなんだ？
「なんで上級魔法はいいのに古代魔法（ロスト・マジック）は発動したらダメなの？」
「さっき言った通り威力が段違いだからだ。」
「それは上級魔法もそうなんじゃないの？」
上級魔法も威力に関しては半端ない。本で読んだ話によると一発で軽いクレーターを作れるらしい。尤も、魔力が一発で常人１０人分くらい持っていかれるらしいが。
「いいか、上級魔法は今でも現存している。しかし古代魔法（ロスト・マジック）は失われている。これは上級魔法より古代魔法（ロスト・マジック）のほうが難しいことを意味している。魔力を除けば魔法の威力は魔法陣の難易度、正確には魔法陣の複雑さによって決まる。失われるほど難しかったのだから失われていない上級魔法より威力が強いのは当然だろう。」
そういえばそうだ。それにしても古代魔法か……一回くらいは使ってみたいな…
「ちなみに古代魔法（ロスト・マジック）はどのくらいの威力なの？」
上級魔法でクレーターができるのだ。それ以上ともなればいったいどのくらいなんだろう。
「そうだな、単純な破壊の古代魔法（ロスト・マジック）なら魔法防壁のかかった王城の外壁を消し飛ばすくらいはできるだろう。」
王城にいたことがないからいまいちわからない。
「ふ～ん。」
とりあえず相槌を打っておく。
「ところでさっき思ったんだけど魔法を創れるなら魔法陣とか知る必要なくなかった？」
「それはこの能力（ちから）を隠すためだ。知られたらおそらく毎日のようにいろんな国からの勧誘があるだろうし危険視されて暗殺者とかも来るかもしれないからな。」
大きな力を持つのは持つので結構大変なんだな。もはや他人事じゃないんだけど。
「いい機会だし、ほかに聞きたいことはないか？」

「もう全部聞いたよ。」
もう魔法に関しては聞きたいことはない。
「よし、じゃあ上に戻るか。」
「うん」
父さんについて上に戻った。

階段で
「お前は魔力がまだ制御できてないからできるまではあの部屋でしか魔法を使うなよ。屋敷を焼けれても困るからな。」
笑いながら言われた。いつか見返したいけどそんな日が来る予定は今のところない。

こんな感じで僕の初めての魔法体験は終了した

第六話　従妹（前書き）

もうストックが切れました。
文章を書くのって難しいですね

第六話　従妹

あのパーティーから一週間、魔法を使えるようになってから六日が経った。
父さんからは「火の玉（ファイヤーボール）」を平均レベルの大きさで発動できるようになったら地下室以外でも使っていいと言われた。
それから毎日ひたすら「火の玉（ファイヤーボール）」を使っている。そのかいもあって最近では最初は直径１メートルもあった「火の玉（ファイヤーボール）」が直径０．９メートルくらいになった。普通の魔術師が使う場合は込める魔力の量にもよるけど大体直径０．３メートル位らしい。
あと０．６メートル縮めれば良いわけだ。
最低でもあと一か月はかかりそうだ。

魔法を一刻も早く外で使うためにも僕は今日も地下室で魔法の練習をしていると父さんに呼ばれた。
なんか既視感（デジャヴ）だ。

僕が父さんに部屋に行くと
「ソラ、先日のパーティーの件について王城に呼ばれた。期日は明日までだ。」
と、なんか不味そうな話をしている。
多分あの賊（まぬけ）の侵入を許してしまったからだろう。きっと怒られるのだろう。
父さんドンマイ。
「いってらっしゃい。」
僕は笑顔で言った。
だって僕関係ないし。むしろ被害者（候補）だし。
「何を他人事のように言っている。呼ばれたのは私だけではないぞ。」

ということは兄さんも呼ばれるのだろう。次期当主だし。
跡継ぎは大変だな。
「お前も一緒に呼ばれたぞ。」
幻聴が聞こえたようだ。
「父さん、怒られるかもしれないけど頑張ってね。」
「だから何を他人事のように言っている。お前も行くんだぞ。」
幻聴ではなかったようだ。それにしてもいったいなぜ？
「怒られるのは父さんと兄さんだけでいいと思うけど。」
僕が呼ばれる意味が分からない。
「ん？何を勘違いしている。ゼノンは呼ばれてないぞ。」
なぜ僕まで？僕は何か悪いことをしただろうか？
父さんや兄さんの部屋に入ったのは家族だから大丈夫なはずだ。もしかしたらパーティーの最中に王様にぶつかったのかもしれない。
「どんなふうに怒られるの？やっぱり死刑とか？」
「お前はなぜ怒られると思っている？」
いやそりゃまあ
「パーティーに侵入者を許したから？」
「そんなものは王は気にしてないだろう。良くも悪くも寛容な方だからな。」
「じゃあなんで僕まで呼ばれるの？」
僕は王様と接点があるとすればあのパーティーだけだ。けれどパーティーには思い当たる節がない。
「それが私も聞いていないのだ。ただ、アラン・ルビンシュテインは下記の期日までにソラ・ルビンシュテインを伴って王城にて王に拝謁せよ、という書状が届いただけだからな。」
父さんも知らないのか。
「まあなんにせよ明日王城に行くのは絶対だからあきらめろ。」
父さんはさらっと言った。
くっ、そんなこと言って王城に入った瞬間処刑とかされたらどうするつもりなんだ。

どうにか拒否する口実を考えないと……
「話はそれだけだ。もう行っていいぞ。」
部屋から出された。
口実を考える暇すらもらえなかった。

地下室に戻ると女の子がいた。
僕と同じ銀髪の髪に赤い瞳、年齢は9歳だ。
彼女は僕を見るといきなり
「水の玉（ウォーターボール）」
と魔法を放ってきた。
とっさに回れ右をして逃げ出す。
魔法は基本的にまっすぐ飛ぶのでそのまま追いかけてくる。
僕も必死に走ってはいるが当然魔法の方が早い。
逃げ方を間違えたかもしれない。
そう考えるや否すぐにしゃがんだ。
「水の玉（ウォーターボール）」は無事僕の頭上を通り……すぎなかった。
僕の頭上で止まると玉の形態を解いて水が僕に降ってきた。
びしょ濡れだ。
先ほどの女の子の方を見ると笑い転げている。
「フレイヤ、何するんだ。」
彼女の名はフレイヤ・ヴィノクール、僕の従妹にしてルビンシュテインの血を受け継ぐ者、あの能力（ちから）は受け継いでいないが、の一人だ。ルビンシュテインの血と交わった場合その時から三代から四代までの間は本家と同じく高い魔力に恵まれる。
だからここにいる理由はわかる。僕と同じで魔法の練習をしていたのだろう。この国を探し回ってもここと同じレベルの設備を持つ場所がそうあるとは思えない。
わからないのはなぜ僕をわざわざ魔法を使ってまで濡れ鼠にしたか

だ。
「何って魔法の練習だけど？」
それにしては僕が入ってきた瞬間、僕の方を向いて魔法を使ってきたように見えた。
「偶然魔法の練習をしていて、偶然魔法を使った瞬間に、偶然その射線上にソラが居たんだよ。」
ずいぶんと偶然が重なったものだと思う。人はそれを故意と呼ぶのではないだろうか。
「僕の頭上で狙い澄ましたかのように魔法を解いたことについては？」
あの時僕に水が降ってきたのはフレイヤが魔法を解除したせいだ。
「ソラに魔法が当たったらまずいと思ってソラのために解いたんだよ。」
僕を濡らすためにの間違いじゃないだろうか。
これ以上聞いても埒があかない。多分こいつはしらばっくれる気だろう。
「それでいつ来たの？僕がここにいたときはいなかったと思うけど。」
僕は話題を変え、気になったことを口にする。
僕はここを一時間もあけていない。あまりにも（僕に嫌がらせをする）タイミングが良すぎる。
「ゼノンさんに、魔法の練習をしたいのですが父と母が許してくれません。どうか隠蔽の術を私にかけてくれませんか？、って言ったら快くかけてくれたよ。」
「つまり隠れてたと？」
「そういうこと。」
悪びれもせずにこう答えやがった。
「ちなみになんで？」
「ソラが魔法の発動に困ってるのを横から笑うため。」
フレイヤは僕と違って魔力の制御がうまい。さっき魔法をピンポイ

ントで解いたことからもよくわかる。
「楽しかった？」
「うん、とっても。」
「じゃあよかったよ。」
僕はため息をつきながらそう答える。
「気分がいいなら僕のためにちょうど服を乾かせるくらいの火を出してくれない？」
自分でやったら火だるまになる。
「いいよ。」
フレイヤはそう答えるとまた僕に
「水の玉（ウォーターボール）」
と魔法をぶつけてくる。
水にあたっても僕の体と洋服が渇くことはない。むしろ全身余すところなく濡れてしまった。
「これはどういうつもり？」
「間違えたんだよ。」
笑いながら言っても説得力は皆無だと思う。
洋服を乾かすのはあきらめた方がいいかもしれない。
「今日はどうしてきたの？」
フレイヤはもう練習なんて必要ないはずだ。仮に必要だとしてもこの部屋でやるほど下手ではないはずだ。
「遊びに来たんだよ。」
僕とフレイヤは仲がいい。二人とも同年代の友達がいなかったせいかフレイヤはよく家に遊びに来ていた。
彼女は男の子のような性格なので僕としても付き合いやすい。
「この前のパーティーで誰かと仲良くならなかったの？せっかく友達を作るチャンスだったのに。」
「この前のパーティーには行けなかったんだよ。ちょっと病気でね。」
そういえばフレイヤの姿を見てなかったがまさかいなかったとは。

僕が探検（自分の家を）していたせいで会えなかったのだと思ってたけど……
ルビンシュテインに多少とも血縁関係のある家はあまり子供をパーティーなどで外には出さない。
子供がいろいろとじゃべってしまうのを恐れているんだろう。
それこそこの前の全員参加みたいなやつじゃないとなかなか許してもらえない。
てことはフレイヤは来年のパーティーまで友達がいないのか……
「てことはフレイヤは来年のパーティーまで友達がいないのか……」
可愛そうなものを見るような目で見ていると
「ひどいわね。どうせソラだって友達いないじゃないか。」
「甘いよフレイヤ。僕はこの前のパーティーで友達を作ったのさ。」
君とは違うのだよ君とは。
「そんな……じゃあもう私とは遊んでくれないの？」
涙に目を潤ませて聞いてくる。
これじゃあ僕が悪いことをしたみたいじゃないか。
「いや、そんなことはないけど……」
「じゃあいいよ。今度紹介してね。」
「お安い御用……じゃないかも」
そういえばあの三人は貴い身分の人だった。まあ僕もだけど。
「あの三人は貴い身分の人だからさ。」
「ソラがそんなことを言うなんてよっぽどなんだね。」
「機会があったら紹介するよ。」
あるかどうかは未定だ。
「ところでその人たちは男？それとも女？」
「女の子二人に男の子一人だけど……」
性別は関係ないと思うけど
「そう、ちなみにそのどちらと仲良くなるつもりなの？」
……
なんでそのことを知ってるんだろう。

「いやそんなつもりはないよ。全くの偶然だよ。」
「ゼノンさんに、ソラが仲良くなった子は2人とも可愛かった、って聞いてるんだけど。」
兄さんめ、よくもそんなことを……まあ可愛かったのは否定しないけど。
「他にも、あいつも婚約者を決めるために必死だからな、とも聞いたんだけど。」
フレイヤはここまでの流れを完全に予想していたのだろうか。
それともこうなるように誘導されたのだろうか。
「いやだから偶然だって。シルヴィアとかレティシアと仲良くなったのは……」
「ふ～ん、一人は王女様でもう一人はオルレアンの一人娘か。それはたいそう可愛かっただろうね。」
そういうとまた魔法をぶつけようとしてくる。
ん？あれは「水の玉（ウォーターボール）」とは違うな。
あれは「雷の玉（サンダーボール）」だ。
僕＝びしょ濡れ＋電気＝感電
……
まずい、殺す気だ。
僕は慌てて「土の壁（アースウォール）」を発動しようとするが
「雷の玉（サンダーボール）」
あっちの方が発動は早かったようだ。
「ぎゃあ」
僕は倒れた。ここで立ち上がったら追撃を食らう気がするのでこのまま倒れておこう。
そう考え目を瞑っていると
「水の玉（ウォーターボール）」
呪文とともに水が降ってきた。
「ぶはっ、何するんだフレイヤ、気絶していたかもしれないのに。」
「叩き起こそうとして使ったんだから当然じゃないか、そもそも気

絶してなかったし。」
いやまあ死んだふりをしてたわけですが
「まあいいよ。」
手加減してくれたみたいだしね
「で、なんであの二人を知ってるの？」
名前だけでどんな人かわかるなんて
「それは第一王女と三大貴族オルレアン家の娘は有名だからだよ。
もしかして知らなかった？」
知りませんでしたね、はい。
「二人ともそんなに有名なの？」
「そうね、道行く人に聞いたら百人に九十九人は知ってるくらい有名ね。」
つまり僕は百人に一人しかいないくらい無知だと？
「まあさっきのでとりあえずは許してあげる。」
それにしては威力がすごかった気がするけど
「さあ今日は何をして遊ぼうか？」

結局この日は日が暮れるまでフレイヤと遊んだ。

第七話　登城

今僕は馬車に乗って揺れている。

ルビンシュテインの屋敷は王都から少し遠い。
歩いていくと朝早く出て日が暮れるくらいに着く位遠い。
最初は初めて見る王都への道のりに興奮して周りの景色ばかり見ていた。けどそれも一時間前までの話。
今はとても退屈している。
そりゃあ珍しいものがあったら退屈しなかったさ。
王都への道のりは確かに珍しかった。けどさ、同じような風景を延々と見続けたら珍しくなくなるし、さすがに飽きる。
父さんに聞くと王都までの道のりは約２時間半、眠るには残り３０分しか残ってない。
つまり何をするにも中途半端な時間なのだ。
はあ、何か面白いこと起きないかなぁ～

それから数分後、馬車の前方に何か見えた。
お、ついに王都か？
と思ったら違った。僕らと同じ馬車だった。
けどおかしい。
同じ馬車なら速度に大差はでないはず。つまり追いつくはずはないのだ。
目を凝らして前方の馬車を見てみると盗賊（？）に襲われているようだ。
ほんとにこんなことあるんだなあ。物語の中だけかと思ってたよ。
やっぱり助けるのかな
「父さん前に盗賊みたいなのがいるけど……」
「ああ、あれか。あれは無視していいと思うぞ。」

父さんがおかしなことを言った。
ここは貴族の義務とかで助けるべきではないだろうか。
「と、父さん。いいの、助けなくて？あの馬車に乗ってる人殺されちゃうよ。」
盗賊に襲われた場合、その末路は悲惨の一言に尽きる。持っている金目のものは根こそぎ奪い取られ、生きている人は高確率で殺される。殺されなかったとしても盗賊たちに捕まれば奴隷として売られる。
まあ本音を言うと彼らも心配だけど、あいつらこっちにも来るんじゃね、という懸念がある。
まあ父さんが負けるとは思ってないけど馬車を壊されでもしたらここから歩いて王都に向かうことになる。
自慢じゃないが僕は家から数回しか出たことがない引きこもりだ。
足腰が弱い自信しかない。
ここは父さんに行ってもらってこの馬車に被害を出さずに蹴散らしてほしい。
そんなことを思っていると
「ソラ、先に言っておくがあの馬車は助けない、じゃなくて助ける必要がないんだ。」
助ける必要がない？
「なんで？」
いやいやいや、明らかに襲われてるじゃん。助ける必要大有りじゃん。
「あの馬車の家紋はオルレアン家のものだ。」
オルレアン？
レティシアちゃんの家じゃないか。なおさら助けないと。
「オルレアン家は王国ができたときから代々王国の近衛騎士をしている。故にあの一族は誰もが幼い時から騎士になるための教育を受けている。」
てことはレティシアも鍛えているのだろ、もし一緒にいるときに何

かあったら僕は守られる側なのだろうか。
女の子に守られる……
明日からもうちょっと真面目に魔法の使い方でも学ぼうかな。
「つまりだ。あのくらいの盗賊なら……」
前方の馬車を見るといつの間にか死体の山が出来上がっている。
その横ではレイモンさんが手で砂埃を払っている。
返り血は一滴たりとも受けていないようだ。
どれだけ強いんだろう。
盗賊たちに斬り傷は見当たらない。武器なしであの数、大体１０人から１５人ほどを倒したのだろうか。

そうこうしているうちに僕の馬車がレイモンさんたちの馬車に追いついた。
「お、ちょうどいいとこに来たねアラン。」
レイモンさんが話しかけてくる。
「私は馬車を血で汚したくはないんだが。」
「そういうなって。」
どうやらこの盗賊たちを王都に運ばなければならないらしい。
しかし馬車が一つしかないため彼らを運ぶと自分は歩かなければならない。
歩くにはここからでも王都はまだ遠いため戦闘中に見えた後ろの馬車に乗せてもらおうと思っていた。
ということだそうだ。
「確かに僕一人なら走ってもいいんだけど……」
レイモンさんが言い淀んでいる。
すると前にある馬車の中から赤い髪の少女が出てきた。
見間違えるはずもない、レティシアちゃんだ。
「なるほどな。」
父さんは嘆息すると
「事情は分かった。だから今回は乗せてやる。」

と上から目線っぽく言った。
同じ貴族なのに……
ともあれレティシアちゃんとレイモンさんをともなって王都に出発した。

さあ着きましたよ、王都に。
……
倒置法で言ったことに特に意味はない。
馬車の中で聞いたところによるとレティシアちゃんたちも王様から呼び出されたということ。
もしかして三大貴族をみんな召集しているのだろうか。
けどそれだと僕を呼ぶ意味が分かんないし……
まあレティシアちゃんも呼ばれたのなら悪い話じゃないだろう。
レティシアちゃんたちが僕らと無関係の可能性も否定できないけど……

それにしても王都（ここ）は人が多い。
前世でも都心とかある程度人が集まるところじゃないとこうも人はいなかっただろう。
この世界にこんなに人がいる場所があるとは正直思っていなかった。
この時代は見るからに中世ヨーロッパと同じく位の文化水準だ。馬車とか走ってるし。
そのころのヨーロッパは病気や戦争などで人口はあまり多くなかったはずだ。
戦争は予言のせい（おかげ？）でないにしても病気の方はそうもいかないはずだ。

この世界には魔法があるけど魔法はあまり病気には効かない。
その理由は病気に対する認識の差だと思う。前世、地球では病気は病原菌、つまりは生物だと証明されている。しかしこの世界では病気は体の異常として見られている。
病気を治す魔法を開発するにも治し方が間違っていては開発しても意味はないと思う。
僕も魔法についてはかなり学んだけど、病気に確実に効く魔法は数えるほどしか知らない。
つまりこの世界でも病気というのは死の対象ということだ。
中世ヨーロッパと同じように人口が病気によって減少しても不思議はないしむしろその方が自然だ。
けどこんなに人がいるってことは衛生管理やらがきちんとしているおかげだろう。

僕がそのことに感心していると目の前に大きな建物が現れた。
城、おそらく王城だ。
父さんとレイモンさんが衛兵たちに話しかけられている。
二人が身分を明かすと衛兵たちは慌てて門の方に駆けて行った。

一分もしないうちに門が開かれた。
中はこれ以上ないくらい豪華なものだった。
僕の家もかなり高級そうな家具ばかりあったがここの比ではない。
全ての家具が高級そうなオーラを放っている。
壊したらとても怒られそうだ。
メイドさんが数人やってきた。どうやら僕たちを案内してくれるようだ。
父さんとレイモンさんはまっすぐ進んで、僕とレティシアちゃんは別の道へ。
あれ？なんで別の道？

メイドさんに聞いてみても
「主から何も言うなと言われておりますので。」
の一点張り。
どういうことだろうか。
まさか人質とか呼ばれるものだろうか。
僕らをネタに父さんたちを脅したりするのだろうか？
……
逃げよう。
僕はそう思うとすぐにレティシアちゃんの手を取って走りだ……そうとしたらメイドさんが後ろに回り込んでいた。
「どうかなさいましたか？」
このメイドさん、できる。
「いやちょっとトイレに。」
「女の子を連れてですか？」
しまった、これじゃあ僕は変態だ。
レティシアちゃんが僕を変なものを見る目で見ている。
「ちなみにトイレは前方の曲がり角を左に曲がるとございますので。」
とりあえずトイレに戦略的撤退だ。逃げるわけじゃない。

ほんとにトイレに行きたかったわけではないのでトイレに入って１分数えたら外に出る。
王城とは言ってもトイレをあそこまで豪華にする必要はないと思う。
便座が金だった。
あれじゃあ気が引けると思うんだけどな。

トイレから出ると外にはメイドさんがいた。
レティシアちゃんは？
「メイドさんだけ？」

「はい。レティシア様は行先を告げたら一人で先に行かれました。」
おいて行かれただって……
このメイドさんが実は暗殺者とかだったらどうするんだ。
もしもの時はレティシアちゃんに守ってもらうつもりだったのに。
男のプライド？
命あっての物種というじゃないか。第一僕がやったら加減できないから殺しちゃうかもしれないし。
そんなことを考えているとメイドさんはスタスタと歩き始めた。
城の中に詳しくない僕はついていくしかない。
着いた先が牢屋とかだったらどうしよう。

そしてメイドさんが一つの扉の前で止まる。
扉だけ見れば普通の部屋、豪華だけど。
けど横にいるのは警備兵……
やっぱり閉じ込められるのだろうか。
僕が躊躇していると非常にもメイドさんがノックした。
コンコン
「ソラ・ルビンシュテイン様をお連れしました。」
すると扉の中から
「やっと来たの。いいわ入れて。」
返事が返ってきた。
なんか聞き覚えのある声だなあ。
メイドさんが扉を開く。

中にいたのはレティシアちゃんと見覚えのある金髪の男女、シルヴィアとリチャードだった。

第八話　脱出

「なんでここに二人が？」
「私たちが呼んだのだから当然でしょう。」
つまり僕は王様ではなく、王子様と王女様に呼ばれていたわけだ。
けど理由がわからない。
王様にしろこの二人にしろ僕は呼び出されるようなことはしていない……はずだ。
「なんで僕を呼んだの？」
そういうとリチャードは当然とばかり言い放った。
「遊ぶために決まってるじゃないか。」
と。
その発想が出なかったのは僕が悪いわけじゃない。
この世界に来て友達と遊ぶなんてことは起こりえなかった。（フレイヤは友達でなく親戚だ）
なぜならこの前まで友達がいなかったからだ……あまり大きな声では言いたくないけど。
つまり僕があんな発想（罰されるとか）しか思い浮かばなかったのはしょうがないことなのだ。
こんなに長々と語って何が言いたいかというと僕は馬鹿じゃないということだ。
「むしろそれ以外何があるの？」
シルヴィアが追い打ちをかけてくる。
「いや、それはいろいろと……」
「たとえば？」
沈黙は金という言葉がある。
まさにこのような状況で使うべき言葉ではないのだろうか。
……
……

気まずい、この上なく気まずい。
ここは話題の転換を図るべきかもしれない。
「そ、そういえばなんで僕たちを遊び相手として呼んだの？もっと他に人がいそうだけど。」
別に僕たちである必要はないはずだ。
王族というならそういう専門の人（いるかどうかは知らないけど）をいくらでも呼び出せるはずだし。
「あいつら堅苦しくていけねえんだよ。」
「そうよ、ここの城の人たちにしてもみんな堅苦しいのよ。」
身もふたもない話だ。
「それは王族だから仕方がないと思うけど……」
「リチャード、お願い。」
「私はアマルティア王国第一王子リチャード・アマルティアと申します。以後お見知りおきを。」
急にリチャードがかしこまって話し出した。いったいどうしたというのだろう。
「家族以外には皆この調子で話さないといけないんだぜ。気が狂っちまうよ。」
どうやらこちらの口調が素でさっきの口調がいつもの口調らしい。
「そんな時に見つけたのよ。同い年でかつ私たちに敬語を使わない人を。」
それは僕らが粗暴だと罵っているのだろうか。
僕がそんな視線を送っていると
「けなしているわけじゃないのよ。むしろほめているのよ。私たちが敬語を使わなくてもいいって言って本当に使わない人は今までいなかったのだから。」
やっぱりけなしているのではないだろうか。
「とにかくこんな不愉快な話は終了よ。」
やっぱり不愉快な話らしい。そりゃそうだとは思うけど。
僕にわかりやすい感じで言うと学校で優等生を演じているようなも

のだろう。
あれって疲れるんだよな。
「あの……何をするんですか？」
今まで黙っていたレティシアちゃんが口を開く。
それを聞きリチャードが待ってましたとばかりに
「今日は城下町に出ようと思う。」
と言った。
「聞いてないわよ。」
「怒られないんですか。」
「面白そうだね。」
上から順にシルヴィア、レティシアちゃん、僕だ。
なんで面白そうかって？
だって僕はまだこの世界の町というものに行ったことがないんだもん。
それに多分、認めたくないけど僕には常識がない。
政治のことに関して言えばシルヴィアやレティシアちゃんのことを知らなかったし、
身の回りのことで言えば僕はこの世界の食べ物は調理済みのものしか見たことがない。
僕は家にいると外の情報を知ることができないし、料理場とかそういう作業する部屋には入れてもらえないからそういうことも全く知れない。
極端な話僕はこの世界についてもっと知りたいのだ。
最初は魔法が珍しくて魔法ばかりに気が向いていたがもうそろそろ他のことも知りたいのだ。
別にルビンシュテイン家の魔法の訓練が厳しいとかそういうことじゃない。
ホントダヨ。
「ここは公平に多数決で行こうぜ。」
リチャードが提案する。

「いいわ。」
「わかりました。」
「いいよ。」
誰にも異存はないようだ。
「じゃあ城下町探索に賛成な人」
今ここにいる人数は４人つまり３人分の手が挙がっていればいいわけだ。
対面にいるレティシアちゃんをみるとあの反応通り挙げていない。
え～と、挙がっている手は
１，２，３，４本だ。
……
４本？
おかしい。
レティシアちゃんは手を挙げていないのだから多くても手は三本のはずだ。
誰が手を挙げているか見てみる。
まず僕が一本手を挙げている。
次にシルヴィアが一本、
そしてリチャードが……二本あげている。
……
「リチャード、なんで二本挙げてるの？」
「いや、あのままだと二対二で引き分けになると思ったからな。どうすればいいかと考えた末、ひらめいたのさ。俺が二つ挙げればいいと。」
どうしよう。
意外とリチャードは残念な子のようだ。
しかもリチャードがそんなことしなくても普通に勝ってたし。
……
「じゃあ三体一で城下町に行……」
「ソラ、四対一だぞ。」

……
黙っててくれないかなあ。
「四対一で城下町に行……」
「反則です、やり直しを要求します。」
レティシアちゃーん。
……
僕にはどうしようもないようだ。
「リチャード、二本挙げても一票は一票よ、それにレティシアももう一回やっても結果は同じよ。」
シルヴィアが助け舟を出してくれた。
「ありがとうシルヴィア。惚れちゃいそうだよ。」
「それはありがとう。それでどうやって城下町に行くつもり？」
軽く流された。
……僕がスルーされるのは前世からの呪いか何かだろうか。
「もちろん普通に行くぞ。」
「馬鹿ね。まあいいわ、試しにそのことを衛兵に伝えてみなさい。」
リチャードが扉を開けて衛兵に聞きに行く。
あ、帰ってきた。
「護衛を大勢つけないとダメだとよ。」
「ちなみにどのくらい？」
僕がリチャードに聞く。
せいぜい二、三人だろう。
「最低でも一個中隊はつけるそうだ。」
……
過保護すぎると思う。それとも王族ならこれくらいが普通なのだろうか
「うん、まあそれもしょうがないんじゃない、王族だし。」
僕が言うと
「ダメだな。」
「却下よ。」

口をそろえて反対された。
いったい何故だろう。
「護衛をぞろぞろと引き連れて行ったら王族ってことがばれるじゃない。」
「ダメなの？」
「ダメに決まってるじゃない。王族ってばれたら私たちはお行儀よくしないといけなくなるじゃない。」
どうやら極力自由に動きたいようだ。ふるまい方とかも込みで。
「じゃあ僕たちだけで行っていいか聞いてみたら？」
あれ？
シルヴィアだけでなくレティシアちゃんまで僕を馬鹿を見るような目で見ている。
「リチャード、ちょっと聞いてきて。」
「おう、任せろ。」
リチャードがまた衛兵に聞きに行く。
ん？
なんか衛兵たちが怒り始めたぞ。
もちろん怒られる対象はリチャード。
「こういうことよ。仮にも一国の王子や王女が護衛なしで出歩くなんてありえないのよ。」
「ふ～ん。ところでシルヴィアはリチャードの扱いがひどいね。」
「何を言っているの？わたしはちゃんとリチャードお兄様に敬意を表しているわよ。」
……
こんなに平然と嘘をつけるシルヴィアはすごいと思う。
「これなら城下町へ行くのはなしですね。」
レティシアちゃんがほっとしたように言う。
そんなに行きたくないのだろうか、面白そうなのに。
「まさか。抜け出すに決まってるだろう。」
いつの間にかリチャードが帰ってきていた。

「もう終わったの？」
「ああ、なんとかな。」
リチャードにはたんこぶができていた。
「抜け出すって具体的にはどうするの？」
「そんなの簡単じゃないか。」
皆を馬鹿にしたようにリチャードは言う。
「まず部屋から出る。そして走って逃げる。」
やっぱりリチャードは残念な子のようだ。
ちらっとシルヴィアとレティシアちゃんの方を見ると僕と同じように馬鹿を見る目で見ている。
さすがにリチャードも視線に気づいたのか
「なんだよその目は。けど他に案なんてないだろう。」
言われてみればその通りだ。
なら
「じゃあ今日はとりあえずその案でやってみて失敗するたびに改善していったらどう？」
我ながらなんて賢い提案。
「いいわね、私は賛成よ。」
シルヴィアは快諾
「わ、私は……」
レティシアちゃんはそもそもやりたくないのだからあまり乗り気ではない。
「おいソラ。いいとこどりすんなよな。」
リチャードは不満を漏らしている。
「賛成なの？反対なの？」
僕が聞くと
「いやそれはまあ賛成だけど……」
「じゃあ決定で。」
「時間も残ってなさそうだし早くしましょう。」
シルヴィアが急かしてくる。

「よし、行くぞ。」
リチャードを先頭に扉に近づき、
「合図したら一斉に出よう。」

「三」

「二」

「一」

「行くぞ。」

僕らは一斉に飛び出した。
ここで僕らの運動能力について振り返ってみよう。
まず、一番できると思われるのがレティシアちゃんだ。なんたって幼いころから騎士になるための訓練を受けている。この年齢だし男女でたいした差も出ないだろう。
次はリチャードだ。言うまでもなくああいう性格だし運動はできるだろう。
シルヴィアもリチャードと変わらないくらいできるだろう。なんだかんだで二人は一緒に行動することが多いみたいだし。
そして誰が一番できないかって？
それは間違いなく僕だろう。
毎日家に引きこもって魔法ばっかりしている。お箸より重いものが持てないわけじゃないけど本より重いものは自信がない。
情けない限りだ。
まあ逃げ出すってことは衛兵に追いかけられるってことで……
追いかけられた場合最初に捕まるのは当然足が一番遅いやつなわけ

で……
「リチャード、おいていかないでよ。」
僕はリチャードに言うが
「悪い、あきらめてくれ。」
そんな殺生な。
あっけなく捕まる僕、リチャードたちの部屋に連れ戻される。
それから数分後みんな連れ戻された。
いやまあ所詮9歳児の体だからね。鍛えられた衛兵たちにかなうはずがないのは自明の理なわけで。

衛兵たちがどこかに連絡している。
あれは間違いなく父さんたちのところだろう。
数分後、僕の予想は違うことなくあたりそれから数十分の間怒られた。
この世界では最長記録かもしれない。（前世では昼間から日が暮れるまで怒られたことがある。）

第九話　計画的犯行

初めて脱出劇からどれくらいの月日が経っただろうか……
もう実に二年近くの時間が経った。
いまだに脱出は成功していない。
しかし、今日こそは行けるはずだ。

今までの教訓を生かし様々な対策をした。
最初はやはり九歳児では大人に勝てないのではないか、その問題を解決するために僕がみんなに身体強化の魔法をかけた。しかも知っている限り最上級のやつだ。
それだけではもちろん問題は解決しなかった。
扉の前にいる衛兵たちと追いかけっこをできるようにはなった。けど、逃げれば逃げるほど追っては増えついには回り込まれるようになった。
どうしようかと考えた末、衛兵たちの目が完全に僕らから離れた瞬間に隠蔽の魔法をかけるようにした。扉を出る時からかけないのはいくらなんでも扉があくのは誤魔化せないからだ。
それでついに成功するかと思われたがリチャードの間抜けなくしゃみにより隠蔽の魔法を使っているのがばれ、警備に魔術師まで配置されるようになった。
それに対抗して僕は土属性の魔法で僕たちの分身を作った。
このころからだろうか、衛兵たちの動きに規則性が現れ始めたのは。
おそらく本格的に警戒し始めたんだろう。
リチャードとシルヴィアに聞いても僕らが来る日は警備がいつもと違うと言っていた。
この日から一時の間、僕らは警備の穴を探すためにバラバラになって逃げるようにした。
一度レティシアは脱出に成功したらしいが僕らに遠慮して戻ってき

たらしい。僕らがいかに足手まといかが分かった。
なおレティシアは最初は乗り気でなかったが元来負けず嫌いなのか一年後にはノリノリになっていた。
ついに二週間前、僕らが集まれるのは週に一回集まれるかどうかだ、ついに警備の穴を見つけた。
先週はこの穴を確実につくために入念な作戦会議をした。

そして今日、その計画を実行する日が来た。
計画は極めて単純だ。衛兵たちの作戦では僕たちの逃走ルートを限定していって、最終的に挟み撃ちにするのが目標だ。
そしてそれは扉から右に出ようが左に出ようが前に出ようが必ずどこかで挟み撃ちにあうようになっている。一度それぞれが別のルートに行った際はみんな十人ずつくらいの衛兵やメイドさんに連行されてきた。
見張りが増員されているのも間違いないだろう。
この計画の穴とは、三方向に（分身を含めて）逃げた場合、逃げるスピードによっては最初の部屋から王城までの最短ルートがから空きになる瞬間があるということだ。

僕らの作戦はこうだ。
まず土人形計１２体を三方向に逃走させる。もちろん詳細に動くスピードやルートを決定してからだ。（これには魔力をかなり使った。普通の人２０人分くらいは軽く使っただろう。）
その間僕の隠蔽の魔法で僕らが部屋に残っていないように見せかける。
衛兵たちが丹念に部屋を調べた後彼らの計画通りの位置に動くのは分かっているのでそれを待つ。
衛兵たちが出ていったら、所定の場所に移動し再び隠蔽の魔法で身を隠し時間を待つ。
時間は僕特製の砂時計で計っているため狂いはないはずだ。

そして時間になったら一気に城門へ駆け出す。
人ごみに紛れればこちらのものだ。
という作戦だ。
失敗したらあちらの計画の穴が埋められてしまうので失敗は許されない。

「リチャード、シルヴィア、レティシア、準備はいい？」
「大丈夫だ。」
「いいわよ。」
「大丈夫です。」
その言葉を合図に用意していた魔法陣に魔力を込める。
いつからか魔力の動きを感知する魔法まで使われていたようで一回身体強化を使った瞬間捕えられたこともあった。
それに対する対策だ。
魔法は一斉に発動する。土人形たちはインプットしていた通りにそれぞれの方向に逃げていく。
僕らには隠蔽魔法がかかる、それに加え今回は幻影の魔法までかけた。
隠れる場所は机の下普通に隠れれば遮るものがないためすぐに見つかってしまう。
それ故に衛兵たちも一回見ただけで素通りする。
そこも調査済みだ。

衛兵たちが出て行った。
所定の場所に急ぐ。
着いたらすかさず隠蔽の魔法をかけなおす。
隠蔽の魔法は激しい動きをすると解けてしまうのが玉にきずだ。

さあここからが正念場だ。
僕は魔法で砂時計を作り出す。

あとはこの砂時計が完全に砂を落としきったら最後の移動だ。
三
二
一
「いまだ。」
僕たちは走りだす。
城門までは残り二百メートルというところ曲がり角はあと三つ、ずいぶんと複雑な構造だがこの城を二年近く走り回って（逃げ回って）いる僕らには庭に等しい。
よし、あと二つ曲がり角を曲がれば城門まで一直線だ。
曲がり角の先に人の気配がする。
これは完全に計画を立てた僕のミスだ。
どうする
どうする
……
はあしょうがない、僕のミスだし僕が囮になるか。
魔法を使える僕が誰かに正面から見つかっても一番逃げ延びれる可能性が高いし。
「三人とも先に行って、ここは僕が囮になるから。」
三人とも僕の意図を理解してくれたのかうなずいてくれる。
この二年間で三人とはアイコンタクトで軽い意思疎通が可能になるくらい仲良くなった。
レティシアを呼び捨てにするようにもなった。
その成果が発揮されたといえる。
曲がり角を曲がる、やっぱり人がいた。
服装はやけに豪華な服で衛兵ではなさそうだ。
これならいける。
三人は先に行った。
僕も続かなければそう思って僕が今まで使っていた身体強化の魔法のもう一段階高い魔法を創り出そうとする。

すると豪華なおじさんが
「君がソラ君かね？」
と聞いてきた。
とても驚いた。僕を君付けするような人はこの城ではレイモンさんしか見たことがない。（父さんは呼び捨てだ。）
僕が戸惑っていると
「そうか、時間がないのだったね。では言いたいことだけ言わせてもらうとしよう。」
言いたいこと？いったいなんだ？
「君のおかげで息子たちはとても充実した生活を送れているようだ。ありがとう。」
律儀に頭を下げてきた。
「レイモンも感謝していたよ。」
レイモン？
レイモンさんを呼び捨てにしている？
そんなことができるのはそれこそこの城には一人しか……
「ほら急いでいるのだろう、後ろに追手が迫っているよ。」
はっと我に返り後ろを見ると本当に追手が迫っていた。
今までの二年間で培った反射的な運動で（追われたら逃げるというものだ）僕は豪華な人のことを忘れ走り出した。

走っている最中に身体強化の魔法をさらに強化したのでなんとか城門まで逃げることができた。
城門では律儀に三人とも待っていてくれた。
「遅かったな。」
「ごめん。ちょっと変なおじさんに会ってね。」
「変なおじさん？」
「うん。まあそれより城門をふさぐからちょっと待ってて。」
これは作戦として組み込んでいたものではないが、時間があったら

やろうと思っていたものだ。
ふさぐといっても薄い土の壁でふさぐだけでただの目くらましにしかならない。
効果も十秒かそこらだろう。
けど十秒もあれば人ごみに紛れるには十分だ。

それからも十分くらいの間は走り続けた。

そして追手を完全にまいたと思ったところで一息ついた。
「やったぞ、ついに脱出してやったぞ。」
「そうね、大快挙よ。」
「やりましたね。」
みんな口々に喜びの言葉を口にする。
僕らはついに城下町に出ることに成功した。

第十話　城下町

「街に出て何するの？」
城下町に出るために様々な策を弄しついに出ることに成功した。
それはいいんだけど街に出てから何をやるかはまるで決めてない。
「もちろん探検だろう。」
「いえ、買い物でしょう。」
「私はもう別に……」
上から順にリチャード、シルヴィア、レティシアだ。
それにしてもリチャードは知らないところに来たらまず探検するのだろうか、僕の家でもしてたし。
「探検と買い物は同時にできるからいいんじゃない。レティシアちゃんは特に何もないの？」
「はい。私は城から出れればそれで……」
レティシアは城から出ることを目的にしてた節があるからな。
出た後のことなんて考えていなかったんだろう。
「よし、探検とついでに買い物に行くか。」
「違うわ。探検がついでよ。」
そこはどうでもいいと思う。
「ところでシルヴィア、買い物したいようだけどお金持ってるの？」
王族だからと言ってお金を払わなくていいわけではない。
「もちろんよ。」
そういってシルヴィアは白金貨を数枚取り出した。
ここでこの世界の貨幣の価値について振り返ろうと思う。
と言っても単純だ。銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚、金貨百枚で白金貨一枚ということだ。
平均的な平民の稼ぎは大体一月あたり銀貨十数枚、一年で約金貨二枚だ。
つまり今僕たちは平民の年収の百倍近い額を持っているということ

だ。
こんなものをそこらの店で使えばどうなるか。
お釣りがないくらいならまだいい。間違いなくパニックになるだろう。
白金貨を当然のように使えるのは名のある貴族や大富豪、それに王族位のものだろう。
「ちょっ、シルヴィア、なんでそんなに持って来てるの？」
「買い物してる最中にお金が無くなったりしたら大変じゃない。だから貯めてた分全部持ってきたのよ。」
白金貨を数枚も使う買い物……
いったい何を買うつもりだったのだろうか。家でも買いたかったのだろうか。
それにしてもこれは困った。
これじゃあ買い物なんてした瞬間に衛兵が飛んでくるだろう。
「シルヴィア、買い物はあきらめない？白金貨で買い物したらすぐに捕まっちゃうよ。」
「いやよ。次に出られる保証もないのだから。」
それは確かに一理ある。
一回逃走するのに二年かかった。
次は慣れてきたことを考えても一年はかかるだろう。
「白金貨がだめならこれならどうだ？」
リチャードが手を差し出してくる。
そこには銀貨三枚のっていた。
「それなら大丈夫だと思うけど。」
銀貨なら多少裕福な家庭ならお小遣いとして渡していてもおかしくない。
多少無理があるけどまあ大丈夫だろう。
「なんでシルヴィアとリチャードは持ってる額が違うの？」
ここで僕は疑問を口にした。
二人とも王族のはずだ。双子だし。

それなのに所持金に差がありすぎる。
「それは簡単なことよ。私がこの作戦が決まってからずっとお金を貯めてきたからよ。」
そういうことらしい。
それにしても二年で白金貨数枚溜まるのか……
どれだけもらってるのやら。
「リチャードはなんでそんなに少ないの？」
二年で白金貨数枚なら一月あたり金貨数十枚はもらってるはず。
何をしたらそんなに減るんだろう。
「それはシルヴィアの分までいろいろ払わされて……」
シルヴィアは自分のお金が使いたくないからリチャードに買わせていたようだ。
……
「あら、人聞きの悪いことを言わないでくれない。可愛い妹のためにって買ってくれたのはリチャードお兄様じゃない。」
「それはお前が可愛い妹のためにって頼むから……」
リチャードはきっとシルヴィアに言い負かされるだろう。
見ているのも面白そうだけどここら辺で助け舟を出しといたほうがいいだろう。
「それでリチャード、その銀貨は使っていいの？」
「おうもちろんだぜ。」
さすが王族気前がいい。
「じゃあこの銀貨をどうやってわけるかだけど……」
まずリチャードは持ってきたんだし一枚でしょ、シルヴィアも買い物を楽しみにしてるみたいだし一枚、レティシアもなんだかんだで女の子だし買い物は好きだろう、だから一枚と……
僕の分はまあ……いらないかな。
僕は街が見てみたいだけだし。
「僕以外が一枚ずつでいい？」
僕が提案する。

「私たちはそれで構わないのだけどあなたはそれでいいの？」
シルヴィアが聞いてくる。
レティシアも申し訳なさそうな視線をしている。
しょうがないから僕がもう一枚銀貨を持っているように見せかける。
「ほら、僕は自分で一枚持ってるから。」
「それなら最初から言ってください。」
「本当ね。性格が悪いわ。」
二人とも納得してくれた。
リチャードは僕に笑いかけてくる。
こいつには見破られてるかもしれない。
何も言ってこないということは文句はないらしい。
「じゃあ行こうか。」
こうして僕らは街の探検（買い物）を開始した。

「ねえ、あれは何かしら。」
そういってシルヴィアが指差したのはリンゴみたいなもの（色は紫だ）、おそらく果物だ。
常識のない僕が果物と分かるのはあれが切られたと思われるものを食べたことがあるからだ。
「あれは確か……」
「あれはチェリモヤです。」
レティシアが言う。
レティシアを見てみると今にもかぶりつきそうな勢いで見ている。
「好きなの？」
「はい。大好物です。」
ただの好物ではなく大好物らしい。

「買ってきたら？」
「そうしたいんですけど、どうやって買うのかが分からなくて……」
でましたブルジョワ発言、経済格差ここに極まり、って感じだね。
「これください、って言って代金言われると思うからその分払ったらいいと思うよ。足りないことはないだろうし。」
そういうとレティシアはそのお店に走って行った。
おおっ、買ってる買ってる。
レティシアはチェリモヤを四個買って戻ってきた。
「どうぞ。」
どうやら僕たちにくれるようだ。
口々に感謝を述べてレティシアからチェリモヤを受け取る。
受け取った順にチェリモヤを食べ始める。
ん？
シルヴィアが手に持ったまま食べていない。
どうしたのだろう。
「食べないの？」
「どうやって食べたらいいかわからなくて……」
リチャードやレティシア、僕はかぶりついているがシルヴィアにはその発想がないらしい。
さすがお姫様だ。お上品な方法しか思いつかないのだろう。
僕たちがかぶりついてるのを見てもそうしないってことはかぶりつく気はないのだろう。
僕はチェリモヤを魔法で食べやすい大きさに切った。
「これでどう？」
「ありがとう。」
笑いながらそう言われた。やっぱり女の子、しかも美少女が笑うと可愛い。眼福だ。
みんな幸せそうで何よりだ。
食べ物で得る幸せなんて安いものかもしれないけど、安くても幸せは幸せだ。

それからも買い物は続いた。
僕はお金がないから何もしなくていい？
それは甘い考えだった。
何もやっていない男が女性の買い物に付き合っている。
荷物持ちにされるのは当然の流れなのかもしれない。
リチャードはどこから買ってきたかは知らないが焼き鳥（？）の串を常時持っていたため荷物持ちを免れていた。
女性の買い物はどこの世界でも長引くものなのだろう。
今も彼女らは服やアクセサリーを選んでいる。
どう考えても彼女らが今着ているものや家にあるものの方が良いものであることは疑いようもないだろう。
けど多分自分で選んだものを着るのが楽しいのであろう。
そう思い、近くにあったベンチに腰を掛ける。
するとリチャードが焼き鳥の串を僕に数本よこした。
「食えよ。どうせ金なんてないんだろう。」
「気づいてた？」
「まあな。持ってるなら最初から出しているはずだしな。」
この二年で少しは賢くなったようだ。
「ありがとね。」
僕は焼き鳥串に対するお礼を言った。
「礼を言われるようなことはしてないぞ。お前はこの計画を成功させてくれたからな。その礼だ。」
だそうだ。
「じゃあそういうことにしておくよ。」
そうこう話してるうちに二人が返ってきた。
「リチャード、あなたはソラにしかそれをくれないのかしら。」
「私もほしいです。」
リチャードの持っていた焼き鳥串は瞬く間に奪い去られていった。
「ソラ……」
「わかってるよ。」

そういって僕は焼き鳥串を一本リチャードに渡す。
そのあとも買い物は続いた。
いままでとどこが変わったって？
リチャードが買う食べ物がことごとく女子二人にとられるようになったり、奢らされるようになっていた。
僕には特にそんなことはなかった。二年間で築き上げた立ち位置みたいなもののおかげだろう。
荷物持ちはさせられたけど……

日が暮れてきた。
「もうそろそろ帰らない？」
さすがに暗くなる前に帰らないとまずいだろう。
どんなふうに拙いかというと怒られ方がひどくなるだろう。
「そうね、もうやりたいことはやったし。」
それはお金が残っていないの間違いではないかと思う。もう全員の所持金を集めても銅貨数枚だろう。
まあ正確には白金貨が数枚あるわけだけど。
「それにしてもうまい具合に見つからなかったな。」
リチャードが言う。
「そうですね。衛兵さんも見かけませんでしたし。」
レティシアも言う。
見つかるはずがないと思う。
なぜなら僕がかなりの魔法を使っていたからだ。
まず隠蔽の魔法は勿論として僕らの声が漏れないように防音の魔法、衛兵に出会ったことに気づかないように三人には幻覚の魔法までかけておいた。
実際は二、三度衛兵たちに遭遇したが、無事やり過ごすことができた。

買い物するときは魔法をいちいち解いていたのでとても疲れた。
けどそのおかげで三人は心置きなく楽しめたみたいなので良しとしよう。
僕たちは王城に向かう。
ちょうど王城が見え始めたとき
「見つけた。」
後ろからそんな声がした。
見つかっても連れ戻されるならもう隠れる必要はないと思って魔法はすべて解いていた。
だから見つかったことは別段不思議ではない。
最初から謝った方が怒られ方がやわぐかもしれない。
そう思い謝りながら振り返った。
「ごめんなさ……」
後ろにいたのはとても城仕えの衛兵や騎士、魔術師ではなかった。
まるで盗賊のような……
そこまで考えたところで僕の意識は途絶えた。

第十一話　盗賊

ここはどこだ。
目の前に広がるのは薄暗い天井。
僕はいったい何をしていた。
思い出せ
……
……
そうだ、リチャードたちとやっと城を抜け出して買い物して帰ろうとして見つかって……
誰に見つかった？
その答えはすぐに頭上からもたらされた。
「やっと起きたか。」
そういって声の主は僕を無理やり座らせる。
抵抗しようにもできなかった。
僕の身体を見るとロープで拘束されていた。
僕を座らせたのは男はどう取り繕ってもごろつきにしか見えなかった。
「さあ全員起きたところで言っておこう。お前たちは人質だ。」
……
どうやら僕たちは誘拐されたらしい。
人質ということは身代金でも要求するつもりだろうか。
男は話を続ける。
「お前たちは大事な人質だからな、危害を加えないことは約束しよう。尤もお前らが逃走なんて馬鹿な真似を測ったりしなければの話だが。」
要するに逃走しようとしたらひどい目に合わせるぞ、ってことだろう。
「まあその格好で俺たち二十数人から逃げられればたいしたものだ

がな。」
目を凝らしてみるとこの男の向こう側に何人もの同じような奴らがいるのが見える。
こいつらは盗賊団か何かかもしれない。
なら手練れとみるべきだろう。
そんな奴らが本当に身代金だけで満足するのか。
「本当に僕たちを解放する気はあるの？」
僕は聞いた。
僕がこいつらなら……
「坊主、賢いな。その通りだ。解放する気はさらさらない。」
となると……
「お前らは身代金を受け取り次第そこらの奴隷商にでも売り飛ばす予定だ。」
やっぱりか。
「そうだな、そこの銀髪と金髪のガキ、お前らは愛玩奴隷と労働奴隷どっちがいい？お前らにはたんまり稼がせてもらうからな。その位選ばせてやる。」
笑いながら男はそう言った。
「こいつらはどうなるんだ。」
リチャードが聞く。
「そいつらは勿論愛玩奴隷だろう。選択の余地はないな。」
レティシアは泣き出してしまっている。シルヴィアも目じりには涙がたまっている。
こんなことになってしまっては当然だろう。
二人には悪いがこれは好都合だ。このまま泣き出してくれれば泣き声が漏れて僕たちの監禁場所がここだとすぐにわかるだろう。
「泣いてもいいが無駄だぞ。この部屋には防音の魔法がかかっているからな。」
僕の考えを読んだかのように男が言ってくる。
ここはおとなしく待っておくしかないようだ。

それに最悪僕が魔法を使えばいい。魔法を使っても二十数人を倒すのは難しいだろう。けど三人が逃げる時間くらいは稼げるはず。

そのまま時間は過ぎていくが助けは来ない。

部屋に男が一人入ってきた。どうやら交渉してきたようだ。
先ほど僕たちに話しかけてきたリーダー格と思われる男に報告している。
「お頭、交渉は成功しやした。あっちはこっちの要求を呑むそうです。」
「金の受け渡し方法もこちらの指定した方法か？」
リーダー格の男が聞く、
「もちろんでさあ、受け渡し時刻は明日の明朝だそうです。」
「そのくらいの条件は？んでもいいだろう。」
交渉は無事成立したようだ。
今は夜、受け渡し時間は明朝と言っていたな。
すぐにでも取引しないのは時間までに僕らを救出するからだろう。
おそらく今の交渉役の男の痕跡なりなんなりを辿ってこの場所にも見当がつけられるはず。
なら安心しても大丈夫だろう。
僕もいくつか保険をかけておいたけど余計なお世話だったようだ。
僕が安心したのも束の間の間、身代金の山分けやらで盛り上がっていた男たちが
「お頭、このガキどもは奴隷商に売り飛ばすんですよね？」
「ああそのつもりだが。」
「多少傷物にしても問題ありませんか？」
そう聞いた下っ端の一人が下品な笑い声を漏らす。
こいつらなんてことを考えやがる。僕たちはまだ１１歳だぞ。
「ダメだな。売値が下がる。」
お頭ナイス、敵ながらあっぱれだよ。

「いいじゃないですか、どうせ売値なんて身代金に比べれば少ないですし。」
「しかしだな……」
お頭が押されている。
このまま押し切られるとレティシアとシルヴィアが大変なことになる。
そんな考えを裏切り他の男たちからも声が出る。
「いいじゃないですか、お頭」
「多少少なくなるくらいなら我慢しますんで」
「じゃあ男の方だけでも」
口々にお頭に言う。
これはまずい。
一人が言うだけなら間違いなく不発に終わっていただろう。
しかし今はほとんど全員が言っている。
これは組織のボスとしてはほぼ全員が言っているのであれば無茶なものではない限り要求をのまざるを得ない。
ストライキのようなものだ。
まずい、お頭が許可を出す前に助けが来ないとレティシアとシルヴィアだけでなくさっきの発言を聞く限りだと僕とリチャードの貞操まで危ない。
「わかった、いいだろう。ただし一時飯のグレードを下げるくらいは我慢しろよ。」
お頭ーーーーーー
まずいまずいまずい
ここはもう……
そう思っていると
「俺が一番だ。」
「いや俺が。」
順番を争っている。
うわっ、殴り合いをはじめやがった。

「やめんか。」
響くお頭の怒声、
「そんなにもめるならナシにするぞ。」
さすがの貫録。
けど僕としてはこのまま仲間割れしてくれた方がうれしかった。
お頭に怒鳴られると男たちは円形になっていく。
何を始めるかと思えばジャンケンだ。
そんな人数でやっても決着がつくわけないのに。
それより男たちが騒いでる今がチャンスだ。
今ならリチャードと会話できるだろう。
「リチャード、どうする？」
「お前の魔法でロープを切って逃げたいところだが……」
リチャードが視線をちらっとレティシアとシルヴィアの方に向ける。
二人とも逃げれる雰囲気ではない。
「助けを待つ？」
「あいつらがあんなことしてる間はとりあえずそうしようと思う。」
「あれが終わったら？」
あれとは間抜けなジャンケン大会のことだ。
「ダメもとで抜け出してみようと思うが頼めるか？」
「任せてよ。」
ぼくは力強くうなずく。
これだとさっきまで用意してた魔法とは別のものを用意した方がいいな。
僕は新たに複数の魔法を待機させる。
待機させてるのは身体強化や「風の玉（ウィンドボール）」だ。属性魔法の初級より上を使うと魔力を込め過ぎて僕らまで吹き飛ぶかもしれないからだ。
刻一刻と男たちのジャンケン大会の脱落者が増えていく。
助けはまだなのか。
ついに勝者が決まった。
と思ったら今度は勝ったやつ順にから僕たち四人の中から選んでい

く。
ついに決まったようだ。
選びたいように選んだはずなのになぜか僕の列は他の女子と同じくらい長い。
僕は女顔じゃない……はずだけどな。
しょうがないこうなったら……
僕たち、正確には僕とリチャードの瞳が輝きを失っていないことが気に食わないのかこんなことを言ってくる。
「助けは来ないぞ、交渉に行った奴は隠蔽の魔法の達人だからな。痕跡を見つけるなんてよほど熟練した魔術師じゃないと不可能だからな。」
他の男が言う。
「そこの銀髪の坊主がさっきから魔法陣を待機させてるのは知ってる、使ってみたらどうだ。」
レティシアとシルヴィアは目を輝かせ、リチャードは勝利を確信している。
こいつ、僕が子供だからと言ってなめてるのか。
ばれてるなら隠しても仕方がない。
僕は「風の玉（ウインドボール）」を発動させる。その数実に二十以上、風の砲弾が盗賊たちを打ち抜くはずだった。
「魔法が発動しない……」
思わず口から漏れてしまった。
いったいどういうことだ。
「そんなに待機させてたのか、ガキのくせにやるじゃないか。だがこの部屋には魔法を封じる魔法がかかってる、無駄なあがきだったな。」
まずいまずいまずい、これじゃあ本当に万事休すじゃないか。
「うわ、うわあああああ」
盗賊たちは僕の叫び声を聞き下品な声で笑う。
パニックになって他にも待機させてる魔法を発動させようとしてい

る。
盗賊たちにはそう見えるはずだ。
その間に僕はオリジナルの魔力障壁を作り出すために魔法陣を創る。
お頭が
「そのガキ、まだ何かしようとしてるぞ。」
もう遅い。
僕の創り出した魔法が発動する。
僕たち四人を囲むように魔力障壁が展開される。
「くそっ、なんで魔法が発動した。」
盗賊たちは戸惑っている。
理由は簡単だ。僕が創り出したこの魔法は僕の魔力が尽きるまであらゆるもの、魔法でさえもを無効化する。
正確には受けたものを跳ね返せるだけの魔力を僕から吸い取っていく。
今もこの障壁は魔法を妨害する魔法を無効化するために僕から魔力を吸っている。
もうすぐ許容量を超え魔法を妨害する魔法は壊れるだろう。
そう思い待っていると魔力の減少が急激に少なくなった。今は盗賊の攻撃だけを無効化しているのだろう。
少し余裕ができたので順々に僕たちのロープを切る。
「やったな、ソラ。」
「助かったの？」
レティシアはいまだに泣いている。
「ひとまずはね。」
僕は答える。
寝ていた、正確には気絶させられていたおかげでさっきまで魔力は満タンだった。
僕の魔力は常人よりはるかに多い。
とはいえ無限ではない。
この程度の攻撃でも続けられれば一時間もつかどうか……

「この障壁は持っても一時間しかない。助けを待つか逃げ出すか決めないと。」
「この壁ぶち抜けば逃げ出せるんじゃないか？」
この馬鹿大声で言うな。
「五、六人は裏から回り込んでおけ。」
お頭の号令。
「他の案は？」
「もうそろそろ助けが来ると思うのだけれど？」
「さっきそこの中が言ってたように追跡は難しいらしい、父さんがいるからできないことはないはずだけど。」
リチャードもシルヴィアもうつむいてしまう。
くっ、自分で聞いておきながら自分でダメ出しとは……
逃げる……のは数の差的に難しい。
助けを待つ……のはいい案ではあるが助けが来なかったら終わる。
……
打開策はない……ことはないけど。
ルビンシュテインの秘密がばれるかもしれない。ただでさえこの障壁を創りだしたというのに。
この障壁は半端じゃなく燃費が悪い。
盗賊がナイフのようなもので突き刺すだけでも下級魔法レベルの魔力を持っていかれる。
魔力は残り四割程度……
仕掛けるならもうそろそろ仕掛けないとまずいだろう。
まあ友達を守るためなら父さんも許してくれるだろう。
絶対ばれるとも限らないし。
そう開き直るとこの状況を打開すべく僕は魔法陣を創りはじめた。
父さんがいつかのパーティーで使っていたような氷の枷。
あんな感じで制圧できるのが理想だ。
けどこの人数じゃ厳しい。
拘束よりも行動不能の方が簡単だろう。

なら雷かな。
人が間違うなく気絶するレベルの雷を半径１０メートル以内の生物へ。
こんなところかな。
そういう効果の魔法を創りだす。

出来た。

すぐさま発動する。すると雷は僕らを含めた生物すべてに襲いかかる、壁の向こうも例外ではない。
もちろん僕らへの雷は障壁が防いでくれる。
これで終わっただろう。そういう魔法を創ったのだから。
「おわったよ。」
「そうか。」
リチャードが座り込む。
シルヴィアは泣き出してしまった。緊張の糸が切れたのだろう。
それから十分後、救助隊が駆け付けた。
これなら無茶をする必要はなかったかもしれない。
シルヴィアとレティシアが泣きながら僕にしがみついてくるが僕が泣かせたみたいなので勘弁してほしい。
もっとも離そうとしたら捨てられた子犬のような目で見てくるから離せないけど……
リチャードは救助隊を見た瞬間気を失ってしまって今は担架で運ばれている。
あいつもやはり緊張の糸が切れたんだろう。
僕がなんでそんなことになってないかって？
前世でも一回誘拐されたからね、二回目だしそんなパニックにはならないさ。
はあ、今から僕だけしこたま怒られるんだろうな。
ほかの三人は怒れるような状態じゃないし……

予想通りこの日はしこたま怒られた……と思いきやそうでもなかった。
王様がかばってくれたらしい。
それでも魔法を創ったことに関しては怒られて、とんでもない罰まで言い渡されてしまった。

「ソラ、お前これから一年王城に行くの禁止な。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0049y/

贖罪の魔術師

2011年11月6日13時24分発行